2016 年度 JEARN 活動報告書

国際協働学習実践集

Interactive Collaborative Learning with the World

Holiday Card Exchange Project より

特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構

（通称） JEARN　http://www.jearn.jp/japan

JEARN 2016 年度　活動報告　目次

	タイトル	所属	氏名	頁
1	Holiday Card Exchange project　実践女子大学短期大学部生ボランティアとのコラボレーション	JEARN　Tokyo Kids Program	栗田　智子	1
2	Heart to Heart Youth Exchange 2016 ロシアの中学生と東京の小中学生が国際文化交流	JEARN　Tokyo Kids Program	栗田　智子	6
3	Save the Innocent　HIV に感染した子供たちの問題をテーマにしたビデオ作り	東京慈恵会医科大学	栗田　智子	9
4	Hiroshima for Peace　ひろしまの絵本「まちんと」や「My Hiroshima」をつかった平和教育 -インドやプエルトリコで活躍する Machinto-	JEARN	高木　洋子	11
5	GOMI on EARTH -人間が際限なく捨てる GOMI 行方 -	JEARN	高木　洋子	14
6	ANNE FRANK Meet & Learn -パネル展開催 6 年目を迎えて-	JEARN	高木　洋子	17
7	世界大正琴交流大会“琴リンピック 2018 イン新潟”に向けて -大正琴の輪は未来を拓く防災の輪-	iEARN 大正琴プロジェクト代表	廣田　元子	19
8	国際協働学習ネットワークによる 防災教育の実践～SDG s に向けて～	防災世界子ども会議 創設者： 実行委員長：	 岡本　和子 納谷　淑恵	21
9	NDYS 参加報告～神戸の震災復興 問題点を世界と共有する～	甲南高等学校・中学校	中原　敦	25
10	課題解決型　国際協働学習の実践と成果～ NDYS2016in 新潟での成果発表～	神戸市立葺合高等学校	茶本　卓子	27
11	THE TEDDY BEAR PROJECT Fostering Tolerance and understanding of cultures other than your own.	JEARN	Puppala Rasagnya	29

12	ICT を活用した国際協働学習 iEARN　Taiwan によるとりくみ	愛知学院大学	野口　朋香	31
13	青少年ペンフレンドクラブ（PFC） ―海外文通の取り組み―	日本郵政株式会社 本社切手・葉書室	青少年ペンフレンドクラブ	33
14	Youth Exchange Program スタッフとしての活動 -ロシアの中学生との交流-	ABC	坂本　雅子	35
15	Kanazawa Youth Program 大学生による 100 人村ワークショップの実践	金沢星稜大学	清水　和久	37
16	海外の子供達とインターネットで話そう ～第 10 回国際女性デー in いたみミモザの日イベント～	いたみＩＴ倶楽部	薮内 昌彦	39
17	ORIGAMI	iEARN Japan	福井　良子	41
18	Girl　Rising	啓明学園中学高等学校	関根　真理	42
19	計画：折り鶴と灯ろうの交換による国際交流	兵庫県立北須磨高等学校	壺井　宏康	43
20	計画：Kansai Youth Project （第 1 回あいくるプロジェクト）	あいくるスタッフ	田中　彩奈	44

Holiday Card Exchange Project の活動報告

実践女子大学短期大学部学生ボランティアとのコラボレーション

所属　JEARN Tokyo Kids Program
栗田智子

アブストラクト

JEARN Tokyo Kids Program として、小・中学生を募集し、Holiday Card Exchange Project を行った。今回から実践女子大学短期大学部の教育プロジェクトと共同主催という形をとり、短大生が、ワークショップの企画・運営にも携わった。大学とのコラボレーションは、小・中学生、短大生、保護者、教員という異世代交流を生み、海外５カ国との異文化交流と合わせて、大変学びの多いプロジェクトとなった。

1. はじめに

JEARN Tokyo Kids Programのワークショップとして、昨年に続き、今年もホリデーカード交換プロジェクトに参加した。昨年はカード作成の時間が足りなかったため、今年は、ワークショップを３日に増やし、実施した。学生の活動についても報告したい。

２．目的と方法

このプロジェクトは、世界の子どもたちホリデーカードを交換し合うことにより、自国と他国との文化を相互に学び、異文化コミュニケーションへの興味を育て、国際的視野を養い、そして世界の人々の多様性を学ぶことを目的としている。今回実施したワークショップは、JEARN Tokyo Kids Programからの協力要請に、「実践女子大学・実践女子大学・短期大学部教育プロジェクト」（今回は短期大学部中心）が応える形で実現した。3回にわたって実施したワークショップは、運営をJEARNと教員が行うだけでなく、学生（短期大学部学生16名）たちがボランティアでファシリテータを務めるなどの支援したほか、実践女子大学の渋谷キャンパスの教室を会場として使用した。

Holiday Card Exchange Projectに登録し、相手国は、アメリカ、ロシア、ベラルーシ、パキスタン、台湾の５カ国と決まった。

３．活動内容

３回の無料ワークショップを実施した。ワークショップの準備として、学生とのミーティングを計 11 回行った。

①第１回ワークショップ 11 月 27 日 … 相手国について知る

1. 海外のパートナー校７校の国の文化について調べる。
2. 日本のお正月をオンラインで紹介するためのビデオレターの準備

②第２回ワークショップ 12 月 18 日 … ホリデーカードの作成

1.　英語でホリデーカードを書き、海外のパートナー校に送る準備を行う。
ホリデーカード作成の際のサポートや、相手国の言葉での表現方法の指導等を中心に、学生ボランティアは活動した。
2.　ビデオレターの撮影
子供たち自身が自分たちの作成したカードの紹介を行った。

③第３回ワークショップ 1 月 22 日 … 相手国から届いたカードの鑑賞

1．相手国から届いたカードを鑑賞し、気づいたことをワークシートに記入する。
2．グループ内で、気づいたことをまとめ、発表する。
3．大正琴プロジェクトの紹介として、琴源先生による大正琴ワークショップを体験する。

次に学生たちの活動内容を、学生の報告書より抜粋したものでご紹介したい。学生は３つのグループに分かれて活動した。ワークショップ以外に 11 回ミーティングを行った。

［グループ 1］
〔事前作業〕
①事務的作業…チラシ作り
（自然と人が集まるイベントではない為、大切なポイントとなった。）
・パワーポイントでの下書き作り
・印刷会社ラクスルへの発注
→　完成までの修正等の作業も多く、チラシ作成に対しての不安を持ちながらの仕事となった。しかし完成したものは、自分達も納得のいく仕上がりとなった。
先生方からのお褒めの言葉もいただき、大きな達成感があった。
②完成したチラシの配布
（地域の小学校や塾等へ行き、配布した。）
→　先生方にアポイントメントをとっていただいたが、現地までは学生のみで行った。
チラシをお渡しするとともに、イベントの詳細についてお話させていただいた。
緊張しながらも、このイベントの魅力について

伝えることができた。
③当日の撮影許可承諾書・保護者やお子様へのアンケート用紙・参加者名簿の作成（Word 使用）
〔当日作業〕
・イベント会場設営
・入口での受付
・会場までの案内
・他のグループのサポート
・イベント中の各分担作業（お子様の補助や撮影）
◎イベント当日よりも、イベント前の仕事が多かった。

［グループ 2］
〔事前作業〕
①企画
（本番 3 回で何を行うか企画した。）
→　ブレインストーミング法を用い、案を出し合った。
そこで出た案をグループ分け、優先順位を決め TO　DO リストを作成、それに沿った準備を行った。
担当を決め、進行状況の連絡は manaba や SNS を活用し、効率的に進めた。
話し合いを行うたび、行ったことや次回までに行うことをまとめ、報告し合った。
②パワーポイントやプリントの作成や必要な材料の準備
〔当日作業〕
・イベント会場設営
・他のグループのサポート
・当日の運営
・プレゼンテーションの発表
・イベント中の各分担作業（お子様の補助）

［グループ 3］
〔事前作業〕
①交流相手国との直接連絡
→　JEARN のフォーラム上での投稿の他、
連絡のつかない相手国への Gmail 上での連絡を行った。
②グループ 1 やグループ 2 からの調査依頼の引き受け
→　各国の挨拶の発音など、調べるべきことを依頼を受けサポートした。
〔当日作業〕
・イベント会場設営
・撮影会場設営（18 日）
・他のグループのサポート
・イベント中の各分担作業（会場内撮影やお子様の補助）
・　ビデオレター撮影

４．成果と課題

小・中学生の参加者は、第 1 回が 23 名、第 2 回は１６名、第３回は１７名であった。
今回は相手校とビデオレターの交換やスカイプ交流もできたので、お互いに顔が見える交流となった。特に台湾の学校とは、引き続き交流が続いている。
参加者のアンケートでは、ほぼ全員が、「大変良かった」「また参加したい」と回答した。

参加者の感想（一部抜粋）：
［参加児童生徒］
・ビデオレターを撮った事が楽しかった。英語が楽しいことがとてもよくわかった。

・小さい子もたくさんいて、大学生のお姉さんたちも優しく接してくれたので、楽しく活動することができました。たくさんの人たちと色んな話ができてとても嬉しかったです。今日はどうもありがとうございました。
・色々な国のことを知れてとてもいい経験になりました。
・外国の人が見るからドキドキした。外国の人が日本のお正月のことを知ってくれたらうれしいです。

[保護者の方]
・子どもたちがこれから国際社会で育って行く中で他の国のお友達と交流する楽しさを知るいい機会となりました。このようなプロジェクトに参加して日本の文化や他の国のことをもっと知りたい、他の国のことばを話せるようになりたいという気持ちにつながってくれればいいなと思います。ありがとうございました。
・祖母として初めて参加させていただき孫共々緊張しました。サポートの学生さん達の初々しい応対に感謝です。
・大学生のアシストが緊張もほぐれてよかったです。国の紹介がまとめられて、わかりやすかったです。

また、この３ヶ月間で、ボランティア学生の取り組みに成長が見られたことも大きな成果であった。このプロジェクトの活動と成長が大学に認められ、プロジェクトリーダーの学生が、実践女子大学の羽山奨学金を授賞した。

以下が、学生がまとめた成果である。

グループ１（広報・当日受付担当）：1 回目のイベントが終わり、メンバーには大きな変化があった。
初めは、遠慮がちで意見を出してくれないメンバーが多くいた。しかし、プロジェクトが進むにつれ、イベントに来てくださるお子様、保護者の方々のことを考え、一人一人が先を読み意見を積極的に出すようになった。
実際にチラシを見てイベントに参加してくださったお子様もいて、嬉しかった。
たくさんの仕事がある中、各自家に持ち帰って取り組んだ方が早いと思うことが多々あったが、グループ全員で仕事をすることに意義があるということを学び、メンバー全員に均等に仕事を分け与えることの大切さを覚えた。

グループ２（企画および当日イベト実施担当）：企画担当だったのだが、最初は何をすればいいか戸惑い、作業計画が上手く進まず焦ることもあった。しかし、最終的にグループのメンバー全員が、積極的に各自の担当を受け持ち、当日までにやり遂げることができた。
当日子供たちに見てもらうクイズのパワーポイントを作る為、パソコンが使用できなくなる時間まで全員学校に残った。慣れないパワーポイントに苦戦しながらも、協力しながら作ることで、一緒に作業することの大切さを知った。また､その日の活動内容を manaba に投稿することや、連絡をとる作業は、初めは対応が難しかった。
だが、最終的に他のグループと連携しながら、細かく報告や相談をし合うことで、グループ 2 単独で作業するより更によいものを作ることができた。リーダーとしては、
今まで、積極的に発言することや人に指示することに苦手意識を持っていたが、グループのメンバーが協力してくれた為やり遂げることができた。また、当日は子供達が楽しんでくれるか不安があったが、多くの子供達が楽しみ、紹介した国々について興味を持ってくれたと感じた。この 1 回目のボランティアの経験を生かし、2 回目・3 回目のボランティアをもっとよいものに出来るよう、協力してやり遂げたい。
グループ３（連絡および当日撮影担当）：相手国との直接的なやりとりであるだけに、また他のグループと比較して人数の面で少ないこともあり、ミスのない作業を常に心がけた。行動の大前提に相手国の方々や参加する子供たちをおき、意識しながら活動することができた。
当日メイン作業として行っていた撮影では、いかにして子供たちの一生懸命な姿や素敵な

笑顔を、より魅力的に引き出せるかに気をつけた。特にビデオレター用の撮影では、１人もしくは２人ずつ映ることに、緊張の面持ちを見せていた子供たちとコミュニケーションを取ることを意識した。学生が子供たちにとってリラックスできる環境を作り、提供してあげることで、自然な笑顔を引き出すことにつながった。また、その後の子供たちの話し方も、明るくハキハキと変わった為、私たち自身も嬉しかった。

全員が心がけたこと：

①児童生徒ごとに対応を変える：積極的に関わることで心を開いてくれる子どももいれば、時間をかけてゆっくり関わるべき（積極的関わりは NG）子どももいた。子どもの性格に合わせて関われるように心がけられるようになった。

②他の学科の学生とのコミュニケーション：英語コミュニケーション学科、日本語コミュニケーション学科に関係なく、学生ボランティア内での交流を深めることの重要性を知った。

来年度も実践女子大学短期大学部と共同で Holiday Card Exchange Project を実施する予定である。今後の課題は以下の２点である。一つは、ボランティア学生も小・中学生も海外との交流に必要な英語のコミュニケーションスキルを持っていない場合があるので、英語コミュニケーション力を伸ばしていきたい。２つ目は、グローバルプロジェクトに参加することで、参加者がどのように成長したのかということを測る評価方法を考えていきたい。

Heart to Heart と Youth Exchange 2016 の活動報告

ロシアの中学生と東京の小中学生が国際文化交流

所属　JEARN Tokyo Kids Program
栗田智子

アブストラクト

JEARN Tokyo Kids Program が、小・中学生を募集し、来日したロシアの中学生と文化交流の Project を行った。４月２４日に Heart to Heart という iEARN プロジェクトのフォーラムを使い、自己紹介のオンライ交流とスカイプによるビデオコンファレンスを行った。６月 19 日には、来日したロシアの中学生と会い、和太鼓などの日本文化体験とロシアの文化体験をワークショップで行い、互いに友好を深めた。

1. はじめに

ロシアのオルガ先生と中学生が Youth Exchage 2016として、高槻市と東京都に滞在することを受けて、JEARN Tokyo Kids Programの小中学生と交流するイベントを２つ行う事となった。

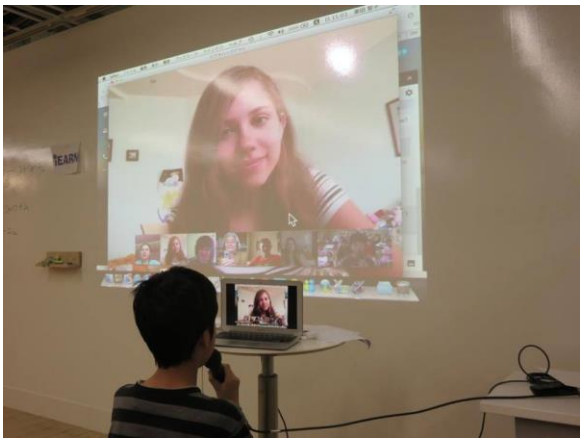
２．目的と方法

ロシアの中学生と友好を深め、互いの文化を学ぶことを目的とする。４月に、Heart to Heart Projectとして来日前にオンラインで交流するワークショップを、６月にYouth Exchange 2016として、来日時に交流する文化交流ワークショップを東京の内田洋行（株）のユビキタス協創広場で行った。
いずれも、小中学生の参加者を募集した。
大学生と高校生がボランティア・ファシリテーターとして参加した。

３．活動内容

① 第１回ワークショップ　４月２４日 … Heart to Heart Project:ロシアの中学生とオンライン交流

１．コラボレーションセンターに入り、相手校の自己紹介を読む。
２．ボランティアのロシア語学科の大学生から簡単なロシア語の挨拶とアルファベットを学ぶ。
３．自分にとって大切な言葉をロシア語と英語と日本語でカードに書く。（来日時に交換）
４．Google ハングアウトを使い、ロシアの中学生と自己紹介などの交流。



②第２回ワークショップ　６月１９日 … Youth Exchange 2016: 来日したロシアの中学生と国際文化交流

１．日本の中学生による「紋切り遊びとうちわ作り」ワークショップ
２．ロシアの中学生による４つのワークショップ（同時並行に実施）
　①ロシアの国紹介
　②ロシアのクリスマスの人形作り
　③ロシア語講座
　④ロシアの通貨と買い物体験

３．和太鼓ワークショップ
　太鼓と芝居のたまっ子座によるワークショップで、最後に全員で合奏。

４．大切な言葉のカード交換

４．成果と課題

小・中学生の参加者は、第１回が７名、第２回は１７名であった。有料イベントのため集客が難しかった。しかし、参加者アンケートでは、内容はとても良かったと満足していただけた。

参加者の感想（一部抜粋）：

【参加児童生徒の感想】

・◉パパに誘われて参加した。「ささら」をはじめて知った。たいこが楽しかった。また参加して、外国のお友達といっしょにしゃべりたい。（８歳）

◉お母さんがみつけてくれて、すすめてくれて、楽しそうと思ったから参加した。
ロシアのお金を見たり、買い物するのが楽しかったです。また、参加したいです。普段できないことや話ができるのが楽しいです。（６歳）

◉太鼓がおもしろかった。クリスマスのかざりを作るのが楽しかった。ロシアのお姉さんがやさしかった。（８歳）

◉楽しそうだったから参加した。とても勉強になり楽しかった。興味もったことはすべて。また参加したい。いろいろ学べるから。（１２歳）

◉前回も参加したので、参加した。初めてロシアの人と会ったので嬉しかった。もっと外国の人と関わりたい。また参加したい。今回の交流が面白かったから。（１０歳）

◉母のすすめで参加した。自分にとって良い経験でした。とても楽しかったです。英語がうまく話せなかったり、聞き取れなくて苦労しました。ロシアと日本の学校の違いに興味を持ちました。もっと会話をロシア人の方としたかったです。
また参加したいです。日本の事を知ってほしいし、外国の事も出身の方から聞ければ、実感を持てると思います。（１６歳）

◉母の奨めで参加した。楽しかった。和太鼓に興味をもった。また参加したい。英語をたくさんしゃべりたいから。（１３歳）

◉ロシアのお友達といろんなことができるから参加した。ロシアのお友達といろいろなことができて楽しかった。ロシアのお友達と写真をと

ったり、太鼓をきいたり楽しかったです。また参加したいです。（８歳）

◉ロシアの人と仲良くなりたかったから参加した。楽しかった。特に太鼓が楽しかった。また参加したい。楽しいから。（７歳）

【保護者の方の感想】

◉ワークショップを通して交流するというのが、コミュニケーションしやすくて、とても素晴らしかったです。子どもにとっては初めての体験ばかりだったのですが、とても楽しかったようです。ロシアのコインを使ったお買い物体験は夢中になってました(^^)
ありがとうございました。

◉今までの積み重ねがあったから、昨日のプロジェクトがとても実りある交流になりました。明日、帰っちゃうよって子供たちに伝えたら、「今度は僕たちがロシアに行かなきゃね」だそうです(笑)

◉ロシアの若者のワークショップからは、思いが動いて、言葉が生まれて、伝えようとする表現が工夫され磨かれてという、触れ合い、交流する原点のようなものを感じることができ、うれしかったです。世界はつながっていけると、本当に思います。

◉外国人と話す機会、経験を積ませたかったので参加しました。また、子どもと外国人の方と何かする機会をよろしくお願いします。

◉世界を近くに感じてほしいと思っています。親としては、きっかけ作りしかしてあがられません。それをしてあげたかった。ロシア人に中学生と一緒のテーブルで話ができて良かったです。もう少しアイスブレイク的なものがあれば、より一層良かったかもしれません。太鼓も良かったです。楽しかった。同じように学生同士の交流会を再び開催してほしいです。“場”を与えて下さりありがとうございます。

◉海外の人達との交流を通じて、語学力をつけてほしかったから参加した。Alexのロシア語講座や太鼓のショーは素晴らしかったです。海外の歌を皆で歌ってみたいです。

◉異国の人との交流、異国の文化等に興味を持つことと楽しいひとときを過ごすために参加した。お菓子がもらえて子ども達が大喜び。盛り上がっていたと思う。難しい文化を勉強するのではなく身近なお金などを学べて楽しんで取り組めたと思います。和太鼓はユーモアがあって楽しめて意外でした。お菓子も食べれて嬉しかったです。とても良い経験になりました。ありがとうございます。すばらしかったので、これ以上望むものはありません。

◉国際交流に興味があるため参加した。ロシアの学生たちによる文化紹介や太鼓のパフォーマンスなどとても楽しめたようです。

◉外国の人･文化とふれあう機会を得るために参加した。とても良かった。

以上のように、iEARN のプロジェクトを通して、子どもが外国の人、文化を実際に体験しながら学ぶことができる機会を保護者は求めており、子どもたちも、コミュニケーション、物作りや和太鼓などの合奏など、様々な実体験を通して学ぶことを楽しんでいた。
しかし、課題として、まだまだ日本の小・中学生が、自分の言葉として、臨機応変に英語でコミュニケーションをとることは難しく、ロシアの中学生と英語運用力の差が大きかった。やはり交流体験を増やすことが重要だと思う。今後もし、iEARN の海外の学校が東京に来ることがあれば、交流の機会を持ちたい。

Save the Innocent の活動報告

HIV に感染した子どもたちの問題をテーマにビデオ作り

所属　東京慈恵会医科大学
栗田智子

アブストラクト

医科大学の看護学科の「医療に関する英会話」という必修科目の授業の中で、Save the Innocent という、ウガンダの学生たちと、HIV に感染した子どもたちの問題を学び、解決方法を探り、ビデオを作成するプロジェクトに参加した。日本とは医療の環境が異なるウガンダの実態をウガンダの学生とともに学んだことは、学生にとって世界の医療問題に目を向ける良いきっかけとなった。

1. はじめに

Teachers Forum で、ウガンダの保健所の先生から、Save the Innocent への参加を勧められた。看護学科の学生に英語を教えているので、授業でこのプロジェクトを導入することにした。

２．目的と方法

このプロジェクトの目的は、HIVに感染した子どもたちをどのように救うべきかを、若者がリサーチし、解決策を考えることで、最終的に、ビデオ制作して自分たちの考えを発信するプロジェクトである。

ウガンダが中心となって1月からすでにスタートしていたが、日本の学校は4月から新学期のため、4月から参加し、ウガンダの学生の作ったビデオにフィードバックを送るという参加方法にさせてもらったが、日本の学生も最後にビデオを作り、ウガンダに発信した。

３．活動内容

１年にわたり、テキストの学習のほかに、ウガンダの学生の活動に合わせて不定期にプロジェクトの活動の時間を作って活動した。

①ウガンダの学生のリサーチ結果のプレゼンのビデオを見て、その感想などをフィードバックとしてフォーラムにアップした。

②そのプレゼンのトピック（栄養失調、ピルバードン、文化と慣習）について、日本の学生たちも調べ、調べた内容をフォーラムにあげてウガンダの学生にシェアした。

③ウガンダの学生が作ったビデオ作品を見て、その感想などのフィードバックをフォーラムに投稿した。

④日本の学生は、グループごとに、解決方法の提案としてのビデオ作品を作り、ウガンダの学生に見てもらった。

⑤教室内でビデオ発表会とプロジェクトの振り返り

４．成果と課題

初めてのプロジェクトで、試行錯誤しながら終えたが、学生にとって学びは大きかったように思う。学生対象のアンケートでは、
「外国の人との英語コミュニケーション力」「ウガンダやアフリカについての知識、理解」「英語で伝えようとする姿勢や調べようとする自主性」「グループワークへの積極性や協力」という点で成長できたという声が多かった。

「人に伝える力、伝えようとする力を獲得できた。自分の中から人へ発信する、人から受信する、その一連の動きを自分でやろう！と思えたことが一番大きいと思う。」という感想があったが、コミュニケーションする生身の相手がいる国際協働学習ならではの成果だと思う。

ネイティブの英語にしか触れたことがなかったようで、非英語圏の学生と英語で交流したことにより、「少し単語が間違っていたり解釈が異なっていても前後の文脈で読みとる力がついた。」また、「外国の人の文化的背景を考えて発表する英語の表現を変えることができる力を獲得した。国際化が進む昨今、患者一人一人の生活背景を考えてケアの展開ができる力が培えた。」「HIV については授業で学ぶのみで、世界ではどんな状況なのかということは知らなかったが、現地からの言葉を直接聴くことによって世界の医療事情に興味が持てて良かったと思う。」など、異文化への配慮を考える視点を持てるようになった点も本プロジェクトの成果であったと思う。

ウガンダの学生に刺激を受けたようだ。
「最初は動画なんて作れないと思っていたが、作ってみたら意外と簡単に作れるのだと分かった。自分たちで作る前に見たウガンダの動画はよき刺激になった」
「ウガンダの学生と実際にやり取りして見て、世界の国の人と授業で繋がったので初めてだったので新鮮で、ウガンダの学生の学習意欲がとても高くて、いい刺激になった。

しかし、一方で課題も多かった。まず学校の年度の区切りが違うため、前期は、日本側は授業の合間を見てのプロジェクト活動で、ウガンダの学生の活発な活動にフィードバックを送ることが中心だった。後期は逆にウガンダの学生の活動は年末には終わってしまい、学生の作成したビデオは、ファシリテーターからの感想をもらっただけだったことが残念だった。んでいた。ウガンダの学生の英語のアクセントに慣れていないため、聞き取りがとても難しく、文字で書かれた資料も送ってもらい、よく理解することができた。
このような難しい状況の中でも、お互いできる範囲で１年間交流を続け、ウガンダの学生が作ったプロジェクト全体のビデオには、日本の学生の写真も入っていて、協働学習を一緒にした記念となり、学生も喜んでいた。なかなか交流する機会の少ないウガンダの学生と、医療問題を考えるこのプロジェクトは将来看護師となる学生たちにとって、貴重な経験となったと思う。

Hiroshima for Peace

ひろしまの絵本「まちんと」や「My Hiroshima」を使った平和教育
～インドやプエルトリコで活躍する Machinto～

JEARN 高木洋子

絵本作家松谷みよ子さんの「まちんと」と被爆者森本順子さんの「My Hiroshima」を使い、人類史上初めて投下された原水爆による無差別殺戮を学習し、平和への感性を国際教育環境の中で育てます。2016 年度はインドとプエルトリコが年間プログラムとして取組みました。

1. はじめに

今年 12 年目となるこのプロジェクト誕生のきっかけは、2004 年黒姫高原童話館で松谷みよ子さんの絵本「まちんと」に出会ったことです。この本を通して世界中の子どもたちに広島・長崎を伝えたいと生前の松谷先生と相談しながら 2006 年 iEARN Conference で iEARN project として立ち上げました。被爆者森本順子さんの「My Hiroshima」を加え、使用言語を日本語・英語・スペイン語として参加対象を広げました。2016 年度はインドの学校と、プエルトリコが主導したボストン・メキシコとの合同学習が主な活動となりました。

https://iearn.org/cc/space-2/group-11

２．目的と方法

2-1 目的

1945 年、トマトを欲しがり「まちんと」(もう少し頂戴)と泣きながら死んだ 3 歳の女の子と、今日も止まない戦いやテロ、自然災害に泣く世界各地の子どもたちが笑顔を取戻すためには？

参加対象：6 才～18 才

使用言語：英語・日本語・スペイン語

Facilitators:

Mali Bickley (Canada) & Jim Carleton

Kristin Brown(USA)

Enid Figueroa(Puerto Rico)

Yoko Takagi(Japan)

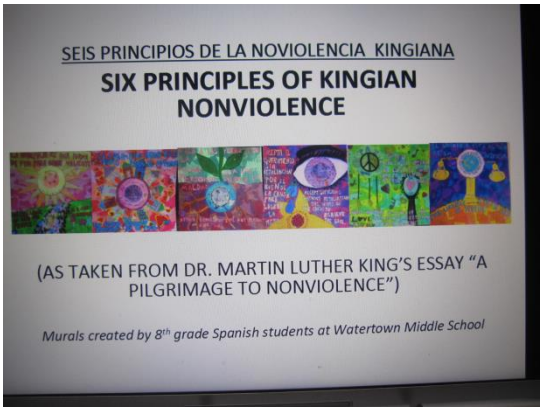
連絡先: 高木洋子　yoko@jearn.jp

2-2 方法

1．参加登録
2．2 冊の本の受領
3．参加生徒の iEARN 登録
4．iEARN Machinto Forum ログイン
https://forums.iearn.org/categories/g11-machinto-hiroshima-for-peace
5. Forum へ投稿
¡En Español!
Introduction My Class 2016-2017
Message after reading Machinto
Machinto Students Works
Chat room for teachers
Chat room for students
Plan video conference
Questions

3．活動内容

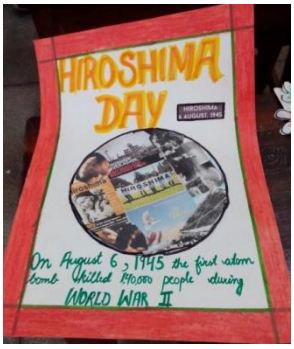
1.Watertown Middle School USA
Teacher: Ruth Henry
Students works - Six Peace Murals



2. St.Peter’s High School-India
Teacher:Suvarna Kuppa
Students works:

What Hiroshima/Nagasaki mean today after 71 years?

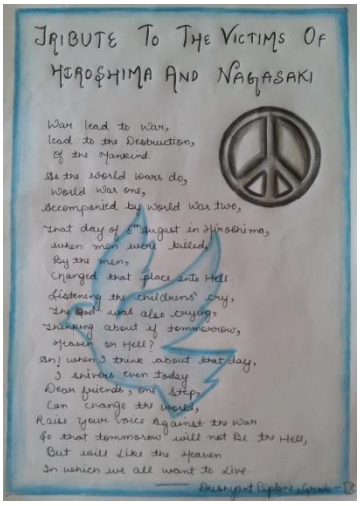
3. Rishikul Vidyapeeth School – India
Teacher: Archana
Students works
“Hiroshima Peace Day”



4. Kamla Nehru Public School-India

Teacher: Harmeet Kaur

Students works



Video Conference

Machinto Completion with certificates at each hand.

5. MX-PR Exchange & Program of Library School "Innovative program Machinto Spanish and English Programs"

Teachers:Jessica and Gabriela -Mexico,
Arlene,Zamira, and Sol, teachers-Perto Rico
Ruth from Boston

Students works: Book published

"The Shared Journey for Peace"

iEARN Latina Conference Presentation

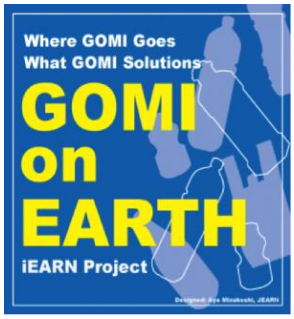
４成果と課題

海外参加校、特にインド、プエルトリコ、メキシコ、アメリカから生徒たちの作品が寄せられました。平和を望むポスターや詩や本です。インド参加クラスとのビデオ会議で彼らは自作の Peace Song を歌いました。

プエルトリコ司書 Arlene は、半年に亘る"Machinto Program of Library School"を、ボストン・メキシコの 3 カ国で取組み、彼女による iEARN Latina Conference の発表は高く評価されたと聞きました。

一方、2016 年度日本国内からの本プロジェクト参加は無く、これらの海外参加校とのコラボレーションの機会が失われたことが残念です。

しかし JEARN 会員赤松さんの Forum 投稿：UN votes to outlaw nuclear weapons in 2017 が、今後の Discussion や作品に現実性と具体性をもたらすと感謝しています。



GOMI on EARTH

～人間が際限なく捨てる GOMI の行方～

JEARN 高木洋子

私は GOMI です。人々は、英語でガーベッジとかトラッシュとか呼んでいます。このプロジェクトは、GOMI on EARTH の長い旅についてです。

1. はじめに

このプロジェクトアイディアは、2015 年夏に iEARN 創立者 Peter Copen 氏から JEARN Office 宛に送られてきた一通のメールから生まれました。彼は次のサイトを紹介し、iEARN Japan としても iEARN 全体としてもいいプロジェクトになるのではないかと提案されました：
http://www.youtube.com/embed/qGGabrorRS8?rel=0
それ以来、GOMI は私の関心事となり、昨年 3 月 29 日には Argentina・Australia・Colombia・France・Indonesia・Japan・Lebanon・Qatar and other iEARN teachers の参加を得て”GOMI on EARTH”を素材とした iEARN ワークショップを東京・国立教育政策研究所会議室で開催しました。今回、生徒を対象とした iEARN の新しいプロジェクト“GOMI on EARTH”を立ち上げ、別途、Teachers Guide を用意しました。皆さんの参加をお待ちします。

2．目的と方法

2-1 目的

人間が際限なく捨てる GOMI。地球が GOMI の山、GOMI の海になる前に、特に発展途上国における GOMI 仕訳分類教育が重要です。このプロジェクトを通して子どもから家庭へ、家庭から地域へと GOMI 文化が浸透し、身の回りの GOMI から、海底のマイクロプラステック問題、地球温暖化問題へと意識が深まり、GOMI 問題の解決策を探ることを目的とします。

2-2 方法

iEARN GOMI on EARTH Forum を使います。
https://iearn.org/cc/space-2/group-478
Teachers’ Guide に沿って進めてください。
パート I であなたは、GOMI が最後の住処（空・海・陸）へ辿り着くまでの長い旅を追う「GOMI 探偵」です。パート II では、世界の GOMI の現実を知ります。更に２つのエキスパート事例を学び、あなた自身が GOMI 問題の有益な解決法を発案し実践する「GOMI 活動家」となります。GOMI をこの地球に新たに増やすよりも、あなたの周りの GOMI 問題を解決する独自な方法や習慣を作り出してみてください。実践してみてください。どんな小さな活動でも、独自な解決法でも、次のメディアを使って記録して下さい：例えば：ビデオ・絵・詩・GOMI 歌・GOMI ダンス・絵本・物語・GOMI ぬいぐるみなど

３．活動内容

2016 年 9 月からスタートしたこのプロジェクトは：Algeria, Australia, Egypt, Georgia, India, Indonesia, Iran, Japan, Moldova, Morocco, Netherlands, Oman, Pakistan, Romania, Spain, Sri Lanka, Taiwan, Tunisia, Ukraine, United States から現在 50 名の先生のグループ登録、65 名の生徒の登録があります。実際の発言者数は先生４２名、生徒 41 名です。
中でも次の学校の取組みは注目されます：

1．Mohammedi Girls School-Pakistan

プロジェクトチームが立ち上がり、10 本のスライドショーが制作されました。

2．　Lincolnton High School - USA

LHS GOMI Team による GOMI Conpost 実験が 13 グループ毎に報告されています。

3．　Beacon House Schools - Pakistan

Students answer Part 1 Questions on Forum. Here is one poem by Ayesha

GOMI

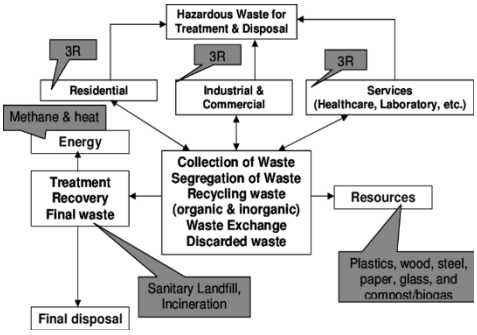
Here comes the garbage truck
To take all our GOMI
Let's see where it takes all of our GOMI
Hey! He took my old pen
And my mother's broken pan
See there he is taking all my empty juice cans
Come let's follow it and see where he goes
Its destination is the Dump Yard
Now I come to know
And there goes all the GOMI
Straight in the yard
Let's say bye to all the workers of the dump yard!!

4.　Al-Azhan 8 Islamic JHS-Indonesia

Students learn How to Classfy GOMI and make GOMI Campaign Day.

5. International Islamic University-Pakistan

“Solid Waste Managements“について自国、ヨーロッパの詳細なリサーチを発表。



6．St.Peter’s High School-India

“We are GOMI Detectives at St.Peter’s HighSchool” 興味深いパートⅠ研究の発表。

４成果と課題

2016 年度は半年間と期間が短かったせいかパートⅠ「あなたは GIMI 探偵」が多く、パートⅡ「あなたは GOMI 活動家」までは進んでいません。Forum では参加生徒による GOMI 投稿が、期待する Interactive, Collaborative な協働学習に進展せず、Facilitator のレスで終了しがちな現況です。Forum の Folder 作りに問題があるのか、2017 年度の課題です。

また、日本からの参加がなく、菊地恵子さんの学生たちによる”**Problem of GOMI in Japan”、”How To Reduce Plastic Bags”**の 2 編をアップして、日本の学校参加の呼びかけになるよう進めていきます。

更に本事業の Co-Facilitator を求めています。関心のある方はご連絡ください：yoko@jearn.jp

ANNE　FRANK　Meet & Learn

～パネル展開催 6 年目を迎えて～

JEARN　高木洋子

「じゃあまたね。アンネ・フランクより」1994 年 8 月 1 日にそう書いたアンネ・フランクは、再びこの自分の日記を手にすることなく、翌年 3 月ベルゲン・ベンゼン強制収容所で亡くなりました。15 才でした。

1. はじめに

ANNE FRANK House から、アンネの生涯を語った大型写真パネル 34 枚を託され、。2009 年末に上智大学で日本で初めての ANNE　FRANK パネル展が開催されました。2011 年春から JEARN が預かり日本各地でパネル展を開催し、6 年目を迎えました。2016 年度最終の開催地は奈良県東大寺学園中・高等学校で第 88 回目です。

本事業は、ウェブ管理更新の浅川和也をはじめ、赤松敦子、村崎佳子、山本真司、高橋数樹、上野浩司、杉本範雄、高木洋子によって運営されています。

https://gcpej.jimdo.com/link/annefrank/

2．目的と方法

2-1 目的

ANNE FRANK パネル展の目的は、このパネル展を通して多くの日本の子ども・生徒・学生・大人がアンネに出会う場を作ることにあります。これらのパネルから、また「アンネの日記」や「アンネのバラ」から発信されるアンネのメッセージを私たちが受け止め、次の世代につなぐことです。

2-2 方法

対象：日本各地の小・中・高等学校・大学・地域の図書館・記念館・歴史館など

申込方法：

次のアンネフランク「カレンダー」を開く：https://gcpej.jimdo.com/link/annefrank/calendar/

開催予定記入が無いことを確認し、オンラインで申込みます。

パネル移動：

前開催地・次期開催地は、本事務局とともに、移動に関する打合せをします。

パネル移動に関するコスト：

次期開催地までの運送費を原則負担するというルールを作っています。また現文部科学大臣補佐官鈴木寛氏のご寄付により、皆さんの負担を減らすことができます。当事務局へ相談下さい。

報告：

終了後は、パネルを使った授業報告や一般報告、参加者の感想やメッセージ、会場の数枚の写真を提出してください。2016 年度各開催地からのこれらの報告は、アンネ・フランク RECORD2016 に記載されています。

その他：

展示に併せて、ミュージカル「ANNE　FRANK」DVD もオンラインで購入することができます。

更に ANNE　FRANK　House から寄贈を受けたアンネの大型写真集「ものがたりのあるミュージアム」を送料着払いでプレゼントします。開催地は勿論、学校図書館・地域図書館にも置いてください。

連絡先事務局：

当パネル展を担当している高木宛に連絡をください：yoko@jearn.jp

3．活動内容

私たちが大切にしていることは、パネルを長期

間寝かせないことです。

できるだけ多くの生徒や大人にアンネに会って欲しい。思いがけない地域から、Web で見た・人づてに知ったと連絡が入ると、アンネが働いていることが分かります。

また最近は、「アンネのバラ」学校記念行事と合わせてパネル展を企画してくださる東京の高井戸中学校や年間行事に組み入れてくださっている淡路夢舞台など、パネル展継続開催の取組みが見られます。

2016 年度は、79 回～88 回の 10 回開催があり、
年間 10 回開催の目的を達成することができました。（開催リスト：成果に記載）

ANNE FRANK House（アムステルダム）や ANNE FRANK Center（アルゼンチン）、タイランドで開催されたパネル展など、海外からのニュースを受信し、日本での活動も発信しています。

特別なニュースとして、Gillian さんと 11 月 8 日スカイプによるインタビューがありました。ANNE FRANK の本を書くということです：

Gillian Walnes Perry MBE
Educational Consultant and Speaker
Honorary Vice President & Co-Founder of the Anne Frank Trust UK

４成果と課題

2016 年度開催地リスト
＃79　関西学院千里国際中学・高等部(大阪)
＃80　高井戸中学校（東京）
＃81　淡路夢舞台（兵庫）
＃82　広島市瀬野川中学校（広島）
＃83　吹田市文化会館メイシアター（大阪）
＃84　西南学院中学校・高等学校（福岡）
＃85　鎮西学院(長崎)
＃86　佐賀市立楯誘小学校（佐賀）
＃87　柳川市立柳南中学校（福岡）
＃88　東大寺学園中・高等学校（奈良）
https://gcpej.jimdo.com/link/annefrank/2016/

課題は今後の 2 つの企画にあります。その 1 は、2017 年度中に念願の 100 回パネル開催記念を行いたいこと。その 2 は、各開催地とアムステルダム ANNE FRANK House を結んで、現地スタッフや世界各国からの Visitor との交流プログラムができるスタッフやその環境を作ることにあります。関心のある方は連絡をください。

世界大正琴交流大会　‘琴リンピック 2018 イン新潟’に向けて

テーマ　―　大正琴の輪は　未来を拓く　防災の輪　―

アイアーン大正琴プロジェクト代表　　廣　田　　元　子

アイアーン大正琴プロジェクトは、2009 年 JEARN 理事会の承認を得て、2010 年「アイアーン　カナダ国際会議」からスタートしました。

ICT（information and communications technology）を活用したグローバルな活動を推進し、世界の子どもたちや、先生方の顔が見える国際交流、異文化交流学習を目指して活動しています。主な活動は、世界各地での大正琴交流、アイアーンのテレビ会議システムを使った演奏発表及び弾き方ワークショップ。訪問した国の学校や先生方に大正琴の寄贈等を行っています。

1.　はじめに

昨年「第 1 回世界大正琴交流大会　琴リンピック 2016 イン新潟」を 8 月 7 日（日）に開催しました。新潟県、新潟市はもとより、日本全国から大正琴の演奏家が集まり、世界からも 106 名の子どもたち、先生方、保護者の方が演奏を披露しました。

2.　プロジェクトのテーマについて

大正琴愛好家のネットワーク（大正琴の輪）は、全国に何万人も存在し、現在も日本各地で地域に根ざす市民文化活動を行っています。このネットワークを生かすことは未来を拓く　防災・減災につながると考えました。災害は日本だけではなく、世界が一つとなって取り組むべき課題です。**大正琴のネットワークと世界の防災ネットワークが繋がれば、〈防災の輪〉**防災・減災に役に立つのではないだろうか。「大正琴プロジェクトとして何ができるか」の問題提起をしてきました。

3.　目的と方法

1)「世界大正琴交流大会　琴リンピックク 2016 イン新潟」を開催する目的

○「大正琴の輪は　未来を拓く　防災の輪」のテーマを、先生や生徒、一般の人たちも含めて会議し、宣言発表をすることによって、「大正琴が持つ音楽の力」を世界の人たちに知ってもらう。

○大正琴プロジェクトの成果発表の場として「琴リンピック」に出演し、コンサートホールでの舞台発表を参加者全員に体感してもらう。

これらの目的を達成するための方法は「琴リンピック実行委員会」が求める「世界大正琴交流大会　琴リンピック」を実現させることでした。

2014 年 5 月から「琴リンピック実行委員会」の協力を得て、中古の大正琴を全国から集めてメンテナンスし、国内の学校や海外の学校へ贈呈することが再びできるようになりました。贈呈楽器台数は現在１９２台以上です。また、大正琴を持って海外で演奏発表とワークショップをする等の活動も並行して行ってきました。※昨年度の総会で発表済

2）琴リンピック実行委員会を**支援する方法**

①　国際交流を妨げる数々のハードル（語学力の不足、ICT 不足、問題発生時の　対応に自信がなく不安である等）があっても、交流ができるように、その国のコーディネータと協力して支援しました。

＜深圳、台湾、イラン、コロンビア、インドネシア、 インド、トルコ、アメリカ、フィンランド、モン

ゴル、ネパール、オーストラリア、ベトナム等 ＞

② テレビ会議をはじめとする ICT（情報とコミユニケ-ション技術）を活用した新しい仕組みで、支援しました。
テレビ会議で各国と大正琴交流　ホームページで大正琴奏法等提供
http://taishokotoproject.com/

③ 国際交流情報の集約・精選・発信
大正琴プロジェクトは、国際交流学習のイベント予定、事例報告など、ホットなニュースをタイムリーに更新し、ホームページで公開、国際交流学習ニュースを満載したメールマガジン「大正琴ニュースレター」を 2016 年 1 月より毎月配信して広報活動支援をしてきました。

④ 国際交流学習事例のデータベース化として、大正琴の e-ラーニングをホームページ上で支援してきました。

⑤ アイアーン・JEARN プロジェクトの提供とコーディネイト 2015 年からは「防災世界子ども会議」とのコラボレーションで「琴リンピック」が開催できるよう支援してきました。

⑥ ヘルプデスクや相手校探しなどの支援として、実際に現地へ出向いて大正琴ワークショップや、大正琴の贈呈をして支援してきました。

⑦ 国際交流学習を容易にするコミユニケーションのツールとして、ホームページを公開、また、Facebook 等でも内容を公開して支援してきました。

⑧ Facebook を利用してチャット等の交流を行って支援してきました。

⑨ 地域のボランティアとみなさんのスキル登録で学校の交流学習支援 として、新潟市での交流支援をしてきました。

⑩ アイアーンカンファレンス等に参加したり、世界各地で大正琴ワークショップをしたりして、推進メンバーの育成とプロジェクトコーディネーターの育成を支援してきました。

⑪ 海外の教師との出会いの場の提供として、「アイアーン国際会議 2014 アルゼンチン　プエルトマドリン」に参加していただき、大正琴パフォーマンスとワークショップ披露の支援をしてきました。

大正琴プロジェクトは、以上のプロジェクト過程で「琴リンピック実行委員会」の支援をしてきました。同時に、「琴リンピック実行委員会」は海外への贈呈楽器と成果発表の場の提供で「大正琴プロジェクト」を支援してきました。

※大正琴プロジェクトのグループは、すべて自費で活動をしています。

4. 成果と課題

「琴リンピック 2016 イン新潟」は 2016 年 8 月 22 日（日）無事終了することができました。その成果として、「大正琴の輪は未来を拓く防災の輪」のテーマはこの活動を通して明確となりました。

「語り合うことは、　信じ合えること」大正琴の楽器を通して老若男女が集い、語り合う。こんな機会が持てた私たちは大変幸せなことだと思いました。心に響く音、旋律、ハーモニー。私たちは言葉の壁を越えて語り合うことができました。語り合うことは信じ合うこと。私たちはお互いに信頼し合う絆ネットができました。私たちは今後も、語り合うことは信じ合えること、信じ合えばこそ人の輪ができることを念頭に置いて、2018 年の「第 2 回世界大正琴交流大会　琴リンピック 2018 イン新潟」までの活動を続けたいと思っています。

国際協働学習ネットワークによる防災教育の実践と成果

～国連 持続可能な開発目標 SDGs の実現に向けて～

防災世界子ども会議実行委員会 創設者 岡本 和子
実行委員長 納谷 淑恵

温暖化に伴う気候変動によると考えられる洪水・集中豪雨・ゲリラ雷雨などの災害リスクに晒される機会が急速に拡大しており、気候変動対策は世界のかってない重要な課題となっています。この課題をどうすれば解決することができるのか。防災世界子ども会議 NDYS は 2016 年、気候変動と私たちの住むまちの「防災・減災・復興」をテーマに主体的・対話的で深い学びの視点で課題解決型の国際協働学習をスタートさせました。

1. はじめに

NDYS は、阪神・淡路大震災から 10 年を機に「大震災の教訓を世界の子どもたちに伝えよう、命の大切さを考えよう！」と、ひょうごの子どもたちと海外の学校との交流学習から始まりました。「コミュニケーションが命を救う！」をスローガンに、災害が引き起こす惨状に目をむけ、子どもたちが、命を守る重要性に気づき、命を守る判断、行動、備えができることを目的として開催しました。2005 年、ひょうごから産官学民の連携・協働によるイノベーション事業としてスタートし、グローバルな防災教育ネットワークの基礎を築きました。

2．目的と方法

2-1 目的

NDYS は、世界と学び合う「国際協働学習」を通した防災教育の促進を目的とするプロジェクトです。

Fig.1 国連 持続可能な開発目標 SDGs：
2030 年に向けて持続可能な社会を実現するための地球規模の優先課題などを明らかにした国際目標

2016 年は、国連 持続可能な開発目標 SDGs を 2030 年までに達成すべく、１７の目標を設定し、「誰一人取り残さない」社会を目指し、国際社会が新たな出発をする節目の年でした。持続可能な開発を達成するために、気候変動などの災害リスクへの対策は、世界全体で緊急に取り組まなければならない課題です。

１月、志のある JEARN メンバーのサポートを得て、持続可能な開発目標 SDGs の実現に向けこれまでの１０年間の実践でつながった６６カ国・地域の学校が参加する NDYS 国際協働学習ネットワークがスタートアップしました。

そのミッションは、防災協働学習を通して、地球規模での防災意識を共有しながら、それぞれの国・地域にあった持続可能な社会づくり（防災文化の醸成）を目指して、地域社会で行動する人材を育成することです。

また、世界と交わる防災教育の実践で、より広く世界を感じとり、自らの課題やミッションを発見しながら、地球規模の課題解決を担うなど、よりよく活動できる資質や能力をあわせもつグローバル人材育成を目標としています。

2-2 方法

急激に変化し、不安定な社会を生き抜く次世代の子どもたちは、これまでの基礎スキルだけでなく、２１世紀型のコンピテンシー（資質・能力）が必要となります。このスキルを育むために主体的・対話的で深い学びの充実は不可欠です。そして多様な人々の意識や社会を変える原動力となる「ネットワークづくり」が急務です。

NDYS の国際協働学習は、ICT を活用して、世界の小中高校の子どもたちが、さまざまな国・地域の防災の知恵や災害から学んだ教訓を共有し、学び合い、地球規模の課題解決に取り組み、その成果を世界へ、未来へ発信する iEARN の日本発プロジェクトです。半年間のネット上の国際協働学習の後に、総仕上げとして「会議」 をもち、連帯を深め、学び続けるコミュニティを築いてきました。

３．活動内容

3-1 NDYS2016 のテーマ

世界で起こっている課題に対して自分の問題として考えられているか（課題認識が弱い）という点からスタートするために、テーマを気候変動と私たちの住むまちの「防災・減災・復興」と設定しました。

3-2 NDYS 国際協働学習プログラムの実践

期　間：2016 年 1 月から 8 月

国連 持続可能な開発目標 11 〈住み続けられるまちづくり〉 ＆ 目標 13 〈気候変動に具体的な対策を〉を達成するために、それぞれの地域の過去の災害、現在の防災状況を学習し、災害が発生したときの問題点を考え、地域の災害安全マップづくりやキッズ防災バッグづくりをしました。テレビ会議や iEARN コラボレーションセンターで意見やアイデア交換をしました。

3-3 ICT が支える学びの環境

テレビ会議をはじめとする ICT と iEARN のコラボレーションセンター、NDYS の WEB が有効に機能し、交流・情報共有・問題解決を通して成果を積極的に海外に発信できる工夫をしました。

3-4 成果発表会

NDYS2016 のまとめとして 2016 年 8 月 3-8 日新潟市で、防災世界子ども会議 2016 in 新潟を琴リンピックと同時開催しました。

Fig.2　葺合高等学校のテレビ会議を通しての発表

世界 10 カ国・地域から小中高校生・教師約 100 名：アメリカ合衆国、イラン・イスラム共和国、インド、インドネシア共和国、オーストラリア連邦、コロンビア共和国、中華人民共和国、トルコ共和国、台湾、日本（ひょうご）

国内 成果発表会　新潟 100 名

テレビ会議による参加 4 カ国・地域 50 名

宣言発表・災害安全マップ展 961 名

生徒一人ひとりが、地球規模な視点から防災を確認することができ、持続可能な社会を拓く防災リーダーとしての素養を身につけることができました。また NDYS が今後どのように、世界と共に SDGs に取り組んでいけばいいのかを示す「新潟宣言」を採択しました。

Fig.3「防災世界子ども会議 2016in 新潟」に集合！

４．成果

参加した生徒の感想＆自己評価（ルーブリック）から：①防災といえば、地震や津波を想定していましたが加えて気候変動の影響により求められる防災のかたちが見えてきました。②防災はグローバルな課題であることがよくわかりました。③自分たちの行動が温暖化に結びついているという問題意識が薄かったことに気づきました。④地域の人々の力を生かせた備えの大切さがよくわかりました。⑤多文化共生の地域づくりとして、日本語の理解が不十分な住民への情報提供のありかたの改善が必要であると感じました。

備えの大切さは、22 年前に阪神・淡路大震災において私たちが学んだ教訓です。また多文化共生は大震災からの気づきです。

プロジェクトに参加することにより、世界に友人ができ、世界とつながっている自分を発見し、広い視野と友情を育てることで、そこから個人的なネットワークが広がり、将来の活動の場の可能性が広がっていくことでしょう。参加のみなさんの 10 年先、20 年先の将来に何がでてくるのか楽しみにしています。

NDYS2016 宣言 2016.8.7

新 潟 宣 言

2016 年は、持続可能な開発目標を 2030 年までに達成すべく、17の目標を設定し、「誰一人取り残さない」社会を目指し、国際社会が新たな出発をした節目の年です。

この年に、防災世界子ども会議 NDYS は、これまでの流れを深め、広げていくためには、持続可能な開発の観点からの防災教育がさらに必要と考え、気候変動と私たちの住むまちの「防災・減災・復興」とテーマを設定し、NDYS2016 より、国連 SDGs 実現に向けた取り組みをスタートさせました。

アイアーンのネットワークを通して、世界 10 カ国・地域から参加の NDYS スクールの子どもたちは、半年間の国際協働学習の総仕上げとして、8 月 3 日 － 8 日、新潟市に集まり、この取り組みの最初の成果を、熱のこもったプレゼンテーションやポスターセッション（災害安全マップ展示など）で、各学校のそれぞれの取り組みを発表しました。

8 月 7 日、琴リンピック会場で、今会議の成果をまとめ、次のとおり新潟宣言を採択しました。

（英文）

“To kindle the passion within,
students need to take responsibility,
for the world is in their hands.”

（和文）

この胸の内にある情熱の炎を燃やして、
私たち学生は責任を果たしていきます。
世界の未来は私たちにかかっているのですから

新潟宣言を採択し、それぞれの言葉で宣言文を発表しました。
トップをきって、日本代表で宣言する兵庫県・甲南高等学校の藤井君（右）

参加国・地域： アメリカ合衆国、イラン・イスラム共和国、インド、インドネシア共和国、
オーストラリア連邦、コロンビア共和国、中華人民共和国、トルコ共和国、台湾、日本

５．未来への目標・方向性

＜国連 持続可能な開発目標 SDGs と NDYS の取り組み＞

NDYS2016 で、これまで防災といえば、地震や津波を想定していましたが、加えて気候変動の影響により求められる防災のかたちが見えてきました。「防災・減災・復興」は地球規模の課題です。

この課題解決に向け、対話・国際協働を通して、新しい教育の歴史を共に創っていきましょう！

世界中がつながり、団結し、行動に移すことにより、SDGs でよりよい未来をつくることができる！

Fig.4 防災世界子ども会議 NDYS ロードマップ

NDYS 参加報告

～神戸の震災復興問題点を世界と共有する～

甲南高等学校・中学校　中原　敦

高校２年生の総合学習で、阪神淡路大震災の復興について一連の授業やフィールドワークを実施した。1 学期間の成果をまとめ、８月に新潟で行われた NDYS で “After 21 years of the Great Hanshin-Awaji Earthquake～its recovery and problems～”という英語プレゼンテーションを行った。

1. はじめに～学校での実践～

本校では、2015 年度より、Global Study Program（3 か月～1 年の留学を義務付ける、グローバル人材養成プログラム、以下 GSP と略）の総合学習のテーマに、「防災・災害復興」を掲げている。理由は、全世界的課題を解決することを目指す課題研究としてふさわしいこと、また、1995 年の阪神淡路大震災を経験し、人や街から直接体験を通じて学ぶことができることである。

授業開きで「防災ゲーム」を行った。大震災という非常時に起きる、様々な状況で明確な答えのない問いにどうこたえるか（全員分の食料がない場合、それを配るべきか否か、等）を議論することができる。

大震災後に再開発された HAT Kobe にある、「人と防災未来センター」を訪問し、大災害の実相を少しでも身近に体験させた。

グループ別フィールドワークを 3 か所で行った。1)再開発に問題の多かった新長田商店街を歩き、店主から当時の様子や、復興過程、現在の問題点を聞いた。

写真 1 新商店街でうなぎ屋店主から話を聞く

2)灘神戸生協とネスレ日本を訪れ、当時の活動や、現在の被災地支援について話を伺った。

6 月の東北修学旅行で、GSP は 1 日宮古市田老地区を訪れた。「万里の長城」と呼ばれた防潮堤に守られていたにもかかわらず多くの死者をだしたのはなぜか、防潮堤の上で語り部ガイドに話を聞いた。また、震災遺構の「田老観光ホテル」で松本社長から、津波襲来時の生々しい話を、社長収録のビデオを見ながら伺った。

２．英語プレゼン準備

１で述べたような学習をまとめて、世界の若者に発表しようと呼び掛けたところ、4 名の生徒が応じてくれた。夏休みの３日間を使って、英語でプレゼンテーション用のパワーポイントと、展示発表用のポスターを作成させた。

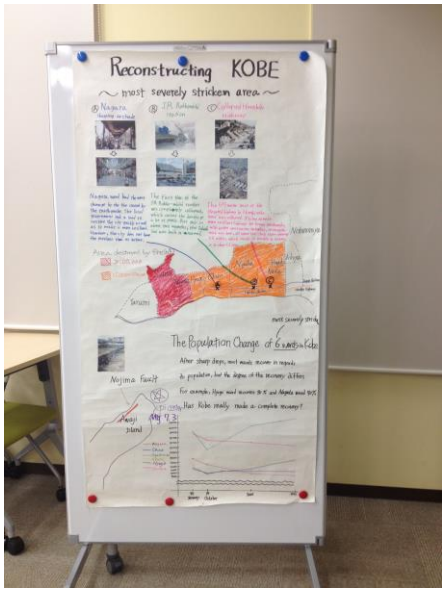


写真 2 発表用ポスター

３．新潟での体験　NDYS

大会二日目にプレゼンテーションは行われた。レベルの高い発表が多かった。特に中国の小学校の発表では、英語力と、コンピューターグラフィックスを用いた IT 能力の高さが顕著で、教育の質の高さがうかがわれた。

本校の発表は、練習を重ねたこともあり、恥ずかしくはない程度のものできたのではないかと思っている。

発表では､阪神淡路大震災 21 年後の問題点を二つ指摘した。一つは、余りにも野心的な復興計画を作ってしまった新長田商店街について、現地フィールドワークと調べ学習から学んだことを伝えた。もう一つは、住宅再建の問題点である。特に最終的に復興住宅に高齢者が集まり、今も孤独死の問題が続いていることを指摘し、見守り活動に参加した様子も紹介した。さらに修学旅行で訪れた田老地区の体験も伝えることができた。最後に、神戸の復興過程から学んだことを、現在進行形の復興、これからの災害復興に生かしていくべきだと結んだ。

写真 3　発表の様子

プレゼンテーション以外にも、実にさまざまな素敵な体験をすることができた。ポスター発表、新潟宣言作り、琴リンピック、豪華食事つきのカルチャーナイト、浴衣での盆踊り、花火大会など、様々な活動に世界各国から集まった同年代の若者たちと参加でき、英語でコミュニケーションをとることの楽しさを経験し、積極的に動くことの大切さを知った。

４．参加生徒感想

阪神淡路大震災について、事前に調べたり、フィールドワークでの経験を活かして発表できたので、内容に関してはいいものが作れたと思います。その後は誕生月ごとに分かれて、いろんな国の人と英語で話しました。英語が全く通じなくて、ダメかと思いましたが何とか、コミュニケーションを取ることができました。ここで感じたのは、自分の英語がまだまだだということと、英語で人に自分の言いたい事を伝えるということの重要さ、難しさを実感しました。その後私は宣言文づくりに参加しましたが、後から訳して考えてみると、とても味があることを言ったんだと思いました。

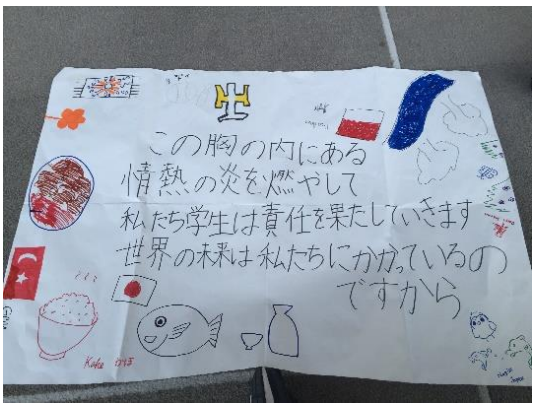


写真 4 グループで作成した日本語の新潟宣言

５．成果と課題

生徒 4 名と参加して、自分自身も生徒たちも学ぶことが多くあり、成長の機会となったと感じている。教師として、海外生徒たちの高い英語と ICT 能力を目のあたりにして、日本の教育の改善のスピードを加速させる必要を強く感じた。

生徒たちは、海外の積極的でレベルの高い生徒たちと 6 日間を共に過ごして、随分と刺激を受けた。英語で何とかコミュニケーションができて自信をつけた部分があると同時に、自分たちの知識のなさや幼さに気づかされたところも多かった。2 学期以降の参加生徒たちの様子を見ていると、学習面でも、物事への取り組みへの面でもかなり良い方向へ変わってくれた。

課題解決型 国際協働学習の実践と成果

～防災世界子ども会議 NDYS 2016 in 新潟 での成果発表～

神戸市立葺合高等学校 茶本卓子

人々の防災への意識や知識を高め、多様な人々の命と文化財を守ることを目標に、ICT を活用して課題研究を行っています。音声をつけたパワーポイントを作成し、ネットワークで海外の学校と共有します。さらにテレビ会議を通して対話・質疑応答の機会を持ち、その成果を英語で発信することで国際協働学習を充実させています。その結果、視野が広がり、論理的思考力、問題解決能力、英語でのプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力が養われています。

1. はじめに

2016 年 8 月 4 日、防災世界子ども会議が新潟で開催されました。気候変動と私たちの住むまちの「防災・減災・復興」をテーマとした取り組みの成果発表会です。地元の中高生他約 100 名に加えて、イラン・トルコなど自然災害の影響を多く受ける海外の 10 カ国・地域から約 100 名の小中高校生他が一堂に会し、課題研究の発表や質疑応答・意見交換が行われ、NDYS2016（新潟）宣言が採択されました。

神戸市立葺合高等学校は、2016 年度に文部科学省の SGH（スーパーグローバルハイスクール）実施３年目を迎えています。５年間の研究課題は「神戸から綾なせ世界、共生への道を開くグローバル・リーダー育成」です。

未来のグローバルリーダーを育成するために、新しく学校設定科目グローバルスタディーズ（GS）を設け、教科横断型の授業、大学・国際機関・企業・NPO の専門家を授業に招くなどの取組を継続し、揺るぎない MAKS マックス（M:人間力 A:実践力 K:知識力 S:言語力）を持った生徒を育成しています。

本校が考案した MAKS は 16 の力から成り立っています。①多角的な視点を持つ多面的で広い視野 ②柔軟性に富んだ問題解決能力 ⑧論理的思考力 ⑨デジタルツールを多面的に使いこなす能力 ⑬他国の文化・歴史に対する理解と広い知識 ⑭高いコミュニケーション能力 ⑯高いプレゼンテーション能力。

そしてその取り組みの中心になっているのが、課題研究→国際協働学習→社会貢献活動です。

生徒達は、国連の持続可能な開発目標 SDGｓから防災、気候変動の分野に絞り、テーマを設定し、課題研究を深めています。その理由は、世界全体で取り組むべき解決を急ぐ課題であり、阪神・淡路大震災からの経験を生かし、地域コミュニティとのつながりを通して、社会貢献活動ができる分野だからです。

２．目的と方法

2-1 目的

課題研究・発表の目的のひとつは、防災に対して多様な人々の関心を深め、人々の命と文化財を守るための活動に積極的に参加していただけるように啓蒙活動を行うことです。そのために課題を見つけ、分析し、グローバルな視点を持って改善法を提示し、発表を行っていきたいと考えています。さらに海外の同世代の人々と意見交換をすることで、将来、いろいろな形で協働できることを期待しています。

2-2 方法

参加形態：新潟会場と本校コンピュータ室をつないだテレビ会議

参 加 者：2・3 年生 6 名 課題研究発表
1・2 年生 18 名+教員４名
テレビ会議に参加

期　　間： 課題の研究期間
３年生 2015 年 9 月から 6 ヶ月
２年生 2016 年４月から 4 ヶ月

内　　容：海外の高校生と互いに防災への取り組みの成果をパワーポイントを使った発表を行い、質疑応答をしました。

３．活動内容

ICT を活用した VR（バーチャルリアリティ）さながら、新潟会場と学校をつなぎテレビ会議参加しました。発表のパワーポイントは、英語での説明音声をつけたプレゼンテーションを用意して、会場で流していただきました。タイトルは３年生による “Providing Disaster Related Information to Non-Japanese People in Japan”（「災害と日本語の理解が不十分な住民への情報提供」）と２年生による”Protecting Our Heritage from Earthquakes”（「歴史的建造物を地震から守る啓蒙活動」の 2 本でした。

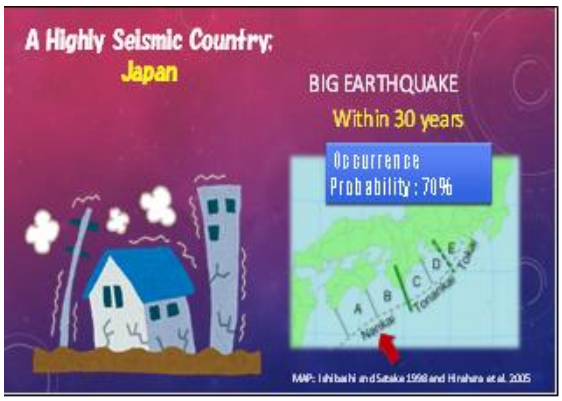


Fig.1 発表のパワーポイントの一枚　３年生の作品

音声つきパワーポイントでの発表を観客にわかりやすくするために、スライドの活字の大きさ、色、字と絵のバランスに普段以上に配慮しました。また、音声面では、発音の明瞭さ、話す速さや間、声のピッチ、感情をどのように入れるかまで、何度も意見を出し合い、録音し直しました。

当日、会場の熱気の中、パワーアップした発表ができ、海外の中高校生とリアルタイムでの話し合いや意見交換ができました。

Fig.2 葺合高校の様子が映っている新潟会場のスクリーン

新潟の会場には、生徒が神戸新聞社の協力を得て英訳した阪神・淡路大震災関連記事を展示していただきました。大震災発生から１週間の出来事をまとめた英語のパンフレットと神戸新聞社の震災展示室に掲示されている震災後の記事の英訳、近年世界で起こっている自然災害を知らせる記事の英訳でした。多くの参加者に手にとって見ていただくことで、一人ひとりが防災意識を強く持ち、地域における責任ある防災実践者として取り組まねばならないことを感じてもらえたら大変嬉しいことです。

神戸市の中央に位置し、生徒が３名亡くなった高等学校の責務として、22 年前の出来事が風化しないように、さまざまな形で世界の人々に伝えていくことの大切さを改めて感じました。

４．成果

課題研究のスタートは課題の発見から始まります。上記の２つの研究も、数字による統計の提示やネットによるデータ検索だけではなく、神戸市役所、教育委員会、幼稚園や小学校でインタビューを行いました。その過程で現状がより明確になり、解決を困難にしている問題がどこにあるのか、解決策の糸口はあるのかが見えてきます。

課題研究は、多角的な視点を持つ多面的で広い視野や柔軟性に富んだ問題解決能力を育てます。また、聞き手を意識して発表するためには、論理的思考力やデジタルツールを多面的に使いこなす能力やプレゼンテーション能力を身につけなければなりません。質疑応答や議論を深めるためにはコミュニケーション能力が必須で、高い英語の運用能力も欠かせません。そして多くの問題に真摯に取り組み、アドバイスをくださる人々との出会いの中で、生徒は、真剣に自分の生き方を模索し、社会に貢献したいという気持ちが強くなってきました。

３年生徒の感想：災害が起こった際に、日本語の理解が不十分な住民にどのように対応すればいいのかについて考察し提案を考えました。これは世界のどの国でも検討できる問題であると私は思います。テレビ会議では予想より多くの人々が防災に関心を持っていることを知ることができました。今後もグローバルな視点で防災についてさらに知識を深めていきたいと思います。

THE TEDDY BEAR PROJECT

Fostering tolerance and understanding of cultures other than your own..

Puppala Rasagnya

The Teddy Bear Project is one of the most popular programs of all iEARN projects.

Dolls sent to each other work as exchange students in this project.

(The doll doesn't have to be Teddy Bear.)We learn each other's culture.

1. During the academic year 2016~2017 TBP had 42 registrations seeking partnership. The successfully completed projects this year were more than 29 involving many students collaborating on various topics through a variety of dolls thus enhancing their understanding and acceptance of diverse cultures.

２. Teddy Bear Project is now active in Argentina, Australia, Azerbaijan, Belarus, Brazil, Canada,China, Colombia, France, Germany, India, Indonesia, Iran,Iraq, Israel, Italy, Japan, Jordan, Kenya, Kuwait, Lebanon,Lithuania, Malaysia, Mexico, Moldova, Morocco, Nepal, New Zealand (Aotearoa), Orillas, Pakistan, Peru, Puerto Rico,Qatar, Romania, Russia, Slovenia, Spain, Sri Lanka, Taiwan,Tajikistan, Thailand, Tunisia, Turkey, Ukraine, United Arab Emirates, United Kingdom, United States, Vietnam, Yemen.

３. The Teddy Bear Project forum has a new look with updates on easy access and user friendly approach.

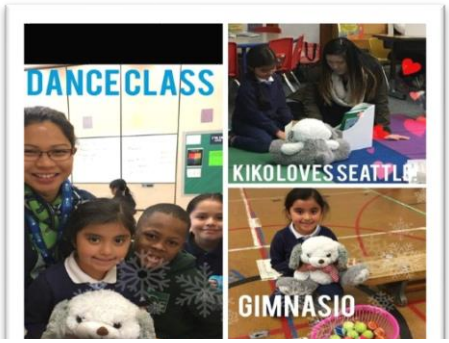
3. Upgrades of the way project is going on

- Skype video conferences.
- Online lectures
- Facebook
- Instagram
- New magazines
- Youtube video sharing
- Web Blogs

４．Summary:

Tabular format of the posts and ongoing Collaborations:

No of Registrations/Folder Threads		
Year	Until Dec 2016	Jan ~ June 2017
Grade 5~7	8	12
Grade 8~10	14	18
Grade 11~13	6	20
Grade 14~18	4	6
Total	32	56



ICT を活用した国際協働学習

～iEARN Taiwan による取り組み～

愛知学院大学　野口朋香

2016 年 3 月、オンラインでの国際協働学習が盛んな iEARN Taiwan を訪れ、台湾での教育事情や現場が抱える課題などを話し合う機会に恵まれた。高校 2 校と中学 1 校を訪れた他、大学が企業と共に学校教育に貢献しようとするプロジェクトの話し合いに参加しながら、日本で ICT を教育に活用していくための多くの知見を得ることができた。

1.　訪問概要

2016 年 3 月 16 日から 22 日まで、台湾の高雄市に本部を構える iEARN Taiwan メンバーの皆さんのご協力のもと、高雄市周辺で ICT を活用した教育を実践している学校を訪問し、実際の授業に参加させて頂いた。具体的な訪問校および訪問内容は以下の通りである。

・iEARN Taiwan 事務局訪問：iEARN Taiwan メンバー及び事務局スタッフとの交流。実際の活動内容や運営について議論（画像①）

①　iEARN Taiwan の運営メンバー

・Taipei Municipal Fuxing Senior High School（臺北市立復興高級中學）訪問：ICT を活用した授業および iEARN のネットワークを活用したクラブ活動参観。ICT を活用した国際協働学習についての意見交換（画像②）

・Sheng Kung Girls' High School（台南市天主教聖功女子高級中學）訪問：ICT を活用した授業および iEARN のネットワークを活用したクラブ活動参観。JEARN の活動を紹介（画像③）

・Wunshan Senior High School（高雄市立文山高級中學）訪問：提携している富山の高校との Skype のやり取りについて発表する様子を参観。台湾と日本の高校生の生活の違い等について議論（画像④）

・Sun Yat-Sen University （中山大学）訪問：大学と企業が共同で学校教育に貢献するプロジェクトミーティングに同行。新たに iEARN Taiwan 参加によるプロジェクトの可能性を議論

②　調査発表会（iEARN クラブ）

③　ICT を利用した発表資料作り（iEARN クラブ）

④　日本の高校との Skype を活用した調査報告（授業）

2. iEARN Taiwan の運営

iEARN Taiwan では、特に PBL (Project Based Learning) を教育の現場に普及することを推進しているが、その活動の要ともなる運営費については、iEARN Taiwan が小中高の教員向けに作成した iEARN の活用方法を教えるためのオンラインコースの受講費で主に賄っている。

オンラインコース開講時期および期間は、年 2 回、2～3 ヶ月で、受講料は 3,500 台湾ドル（日本円でおよそ 13,000 円）。その収益を運営費に充てたり、オンラインコースのコーディネーターへの謝礼としている。

オンラインコースを修了した受講生には、「修了証」と iEARN Taiwan Teacher という資格が与えられるシステムで、この資格は台湾で徐々に認知度が高まっているため、最近では教員が個人的に受講するだけでなく、在籍する教員にコースを受講させる資金獲得のため、学校側が積極的に助成金やファンドに応募するケースも増えてきている。そして、これらの学校側からの取り組みが、結果的に iEARN Taiwan の存在や活動を Ministry of Education が認知し評価するようになった大きな要因でもある。

iEARN を利用する際、全く何もわからない状態から、「英語」で利用方法を学ばなくてはならないとなると、日々の業務でただでさえ忙しくしている多くの教員は、実際の利用に至るまでにかなりの時間や労力がかかってしまうという懸念のために、利用を断念してしまう可能性がある。しかし、母語によるオンラインコースとコーディネーターのサポートがあれば、ハードルもかなり低くなるのではないだろうか。また、ある程度認知されている修了証が得られるのなら、教員側のオンラインコース受講へのモティベーションも上がり、コースを提供している側にとっても、受講生が増えることで認知度が高まるだけでなく実質的な収益も増え、さらに様々なプロジェクトを展開する余裕も生まれてくる。まさに Win-Win の構図が、現在の iEARN Taiwan の運営には存在していることがわかった。

3. まとめ

今回の訪問で、台湾の生徒たちの学習に対する前向きな姿勢や、先生方の新しいものを積極的に取り入れていこうとするバイタリティから多くを学ぶことができた。台湾と日本では、入試制度や学校教育に対する考え方にも違いがあり、台湾でうまくいっている方法を、そのまま日本に取り入れることで、同様の効果が得られるとは限らないが、少なくとも従来の枠組みを超えて新しいプロジェクトを取り入れた学びを提供しようとしたり、その方法について学ぼうとする教員を積極的に評価する台湾の姿勢には、日本も学ぶべきことが多いのではないだろうか。

また、現在は順調な iEARN Taiwan の運営についても、最初は数人のボランティアだけで始まり、軌道に乗せるために何年も苦労したとのことである。それでも今まで続けてこられたのは、「この活動は必ずこの国の子供たちの未来の役に立つ」という信念と、それぞれのメンバーが「家族」として支え合おうという信頼があったからだという。

数日間の滞在ではあったが、台湾の人達が持つ、新しい事に対する好奇心と、上手くいく可能性がある事は積極的に取り入れていこうとする姿勢、そして何よりあたたかい人柄を知るには十分な日数であった。そして、そうした考え方や価値観が、教育に対する寛容な態度や積極的な姿勢を生み出していた。

JEARN のメンバーとして、iEARN Taiwan 訪問の機会が得られたことに深く感謝している。iEARN の素晴らしい教育理念のもと、世界中に多くの仲間や同志がいることを再認識しながら、数多くの示唆やアイディアが得られた今回の経験を、今後の研究活動に役立てていきたい。

青少年ペンフレンドクラブ（PFC）

―海外文通の取組―

日本郵便株式会社　本社　切手・葉書室
青少年ペンフレンドクラブ

「Peace（平和）」「Friendship（友愛）」「Culture（教養）」という三信条を目的とし、日本国内はもとより世界中の友達と手紙を交換しながら世界で起こる様々なことを知り、平和な社会をつくることを目的とするクラブである。1949 年 6 月に郵便友の会として設立され、現在は手紙文化振興という観点から、弊社が運営している。

1. はじめに

手紙を通じた国際交流活動の促進として、iEARN（アイアーン）及び JEARM（ジェイアーン）のネットワークで展開する PFC 海外文通プロジェクトにアプリケーションフォームを掲載し、児童・生徒のペンパルリストを入手、PFC 会員との海外文通活動に取り組んでいる。

２．目的と方法

2-1 目的

手紙のやり取りを通して、国際親善、国際理解、相互理解の促進に努めることを目的としている。

2-2 方法

具体的方法として、毎月発行の会報誌「レターパーク」の海外ペンパル紹介コーナーに国名、名前、年齢、趣味・文通希望相手など平均 40 名程度を掲載し、PFC 会員（こども～大人）からの希望に応じて相手の連絡先をお知らせして手紙の交換を行っている。

３．活動内容

2016 年度（2016 年 4 月～2017 年 3 月）においては、iEARN 及び JEARN のネットワークを通じて得た 191 名の海外ペンパルリストを会報誌「レターパーク」に掲載し、PFC 会員からの文通申込みは 119 件であった。（別紙参照）

４成果と課題

昨年度に引き続き本年度も iEARN 及び JEARN のネットワークから多くの方をご紹介いただき、日本の小・中・高校生を中心に、手紙のやり取りを通した海外交流の橋渡しができた。また、過去に文通相手の募集を行った学校からの再掲載依頼をいただくなど、当プロジェクトの活性化に繋がった。

しかしながら、学校からの複数名による文通相手の募集申込みに対し、文通希望者からの申込みが行き渡らなかったケースが見受けられたため、会報誌「レターパーク」の誌面等を利用し、PFC グループ等団体からの申込みを働きかけたい。

また、次年度もより多くの PFC 会員が海外文通に興味を示し、文通申込みに結び付けられるよう、PFC 会報誌等を用いた英文手紙の文例やコツ、海外文通実践者による「私の海外ペンパル」掲載を本年度に引き続き実施したい。

2016年度　iEARNからのお申込みに対する紹介数

	掲載号	国名	学校名	紹介人数
2016年	4月号	ベラルーシ	Mogilev Secondary School	5
		アメリカ	Saint　Joseph Grade School	8
		アイルランド	St.Oliver's National School	7
	6月号	パキスタン	Shahwilayat School	1
		アメリカ	Saint　Joseph Grade School	17
		台湾	National Yujing Senior Vocational School of Technology and Commerce	1
	7月号	ベラルーシ	Mogilev Secondary School	18
		台湾	National Chao Chou Senior High School	2
	8月号	台湾	Pei Shin Junior High School	10
	11月号	台湾	National Chao Chou Senior High School	2
	12月号	台湾	Taiwan Municipal Rende Elementary School	9
2017年	1月号	台湾	Taichung Municipal Chung-Lun Junior High School	8
		スロベニア	Primary School Antona Ingolica Spodnja Polskava	11
	2月号	台湾	Zhuwei High School	12
	3月号	台湾	Taiwan Municipal Rende Elementary School	8
	合計	6カ国	11校	119

Youth Exchange Program のスタッフとしての活動

ロシアの中学生との交流

所属　ABC　氏名　坂本雅子

iEARN の活動は教員や教育関係者が中心であることが多いが、子供たちを世界につなげたいと願う保護者が活動をサポートする方法を探るべく、ロシア・日本国際交流プログラムにスタッフとして参加した。結果、iEARN・学校・地域の保護者・公的機関がつながり、多くの協力を得て学校訪問が実現された。このような国際交流の実現を望む声が多く上がり、今後はどのような方法でこの活動を広げていくかが課題になると思われる。

１．はじめに

近年、真の国際交流を望む保護者が一段と増え、その思いはますます強くなる傾向にある。今回、ICT を活用した国際協働学習を目指す iEARN の活動の中で、先生や教育研究者ではない保護者が、子供達を世界につなげるためにどのようなサポートができるか探るべく、スタッフとしてロシアとの Youth Exchange Program に参加した。

２．目的

子供たちを世界につなぐため、地域の方に iEARN を紹介し、その理念を伝え、iEARN ロシア・日本 Youth Exchange Program において、学校・地域の保護者・市の公的機関の協力を得て、学校訪問を実現させる。

ロシア･日本、双方の学生たちがお互いの国の学校教育に触れ、相互理解が深まるようサポートする。

３．活動内容

（1）学校探し

校長先生に連絡を取り、直接協力を打診した地域の小学校が１校（高槻市立芝生小学校）、都市交流協会・教育センターからの紹介で決定した中学校が１校（高槻市立第六中学校）、計２校への訪問が決定。

（2）交流プログラムの作成

プログラム内容は、校長先生･担当課の先生･iEARN メンバー･保護者による会議で決定。小学校では５年生と一緒にピースメッセージボードを作成し、中学校では、2 年生の各クラスで交流後、総合学習の時間（ダンス、ストンプ、ダブルダッチ等）･課外活動（剣道部･吹奏楽部）に参加し、相互理解を深めることとなった。

（3）協力してくれる保護者の募集

学校訪問では、プログラムの円滑な進行のために、多くのスタッフが必要である。特に小学校では、生徒同士の英語による直接的な意思疎通が困難であることが予想されたため、保護者のネットワークを生かし、英語指導経験のある保護者を募り、通訳および交流のサポートをお願いした。

４．成果と課題

iEARN における ICT を活用した国際交流のノウハウに、フットワークの軽さが強みである保護者のサポートを加えることによって、多くの協力者を集め、学校・地域の保護者・公的機関をつなぎ､学校訪問を実現することができた。

他の地域の保護者からも、同じような活動を望む声が上がっている。今後は、どのようにして、より多くの地域で iEARN の活動を認知してもらい、保護者・学校および公的機関をつなぎ、未来を担う子供たちが世界につながる環境を整えていくかが課題となるだろう。

FUN at Takatsuki city

Kanazawa Youth program

大学生による「100 人村」ワークショップの実践

～小学校の国際理解教育の導入授業として～

金沢星稜大学　清水和久

総合的な学習の時間は、まず共通体験が必要であり、その共通体験から児童が課題意識を持つことが重視される。それで、国際理解教育を行う上で、ワークショップ形式の体験型授業は、小学生の課題意識を高めるうえで有効である。そこで小学校教員を目指す大学生が小学校に出かけて行ってワークショップを行うことにした。「100 人村」の内容に加え、「世界で一番大きな授業」の資料も学生が独自に加えることで、学生自身が世界の現状を学ぶことにつながった。

1. はじめに

平成 30 年度から実施される新学習指導要領では、英語が教科となり、5, 6 年生で週 2 時間、3, 4 年生で 1 時間行われることとなる。移行期間も含めて、結果的に総合的な学習の時間が実質的に削られ、英語に振り替えられることになる。そのため、総合の時間で長時間必要な大型のプロジェクトは実施しにくくなっていくと思われる。

しかし、英語の教科化とともに実際に海外と交流し、英語を使ってみたいという体験の需要は高まる。そのような状況の中で、「100 人村」のワークショップを実施することで、世界で話される言語の種類や、多くの国の人々とコミュニケーションをとる上で英語が必要であることを、100 人村の住人として体験できる。これらの体験から、英語は人と人を繋ぐコミュニケーションツールであることが理解でき、英語学習のモーティベーションも高めることができる。

iEARN のテディベアプロジェクトなどは、手軽に取り組めるので今後の展開が期待される。

２．目的と方法

2-1 目的

１）学生自身がワークショップ内容を決定することで国際理解の知識を深める。

２）日本の小学校で実際にワークショップを行い表現力を高める。

３）台湾で同様のワークショップを英語で行い、プレゼン力を高める。

2-2 方法

ワークショップ実施者：
金沢星稜大学清水ゼミ 6 人

ワーショップ対象校：石川県内小学校 6 校
：台湾　小学校 3 校

期　間：2016 年 7 月から 2 月

１）ワークショップの内容の検討と作成

２）日本の小学校でのワークショップの実施

３）台湾の小学校でのワークショップの実施

３．活動内容

3-1　ワークショップの内容の検討と作成

ワークショップは、開発教育協会の「世界がもし 100 人の村だったら」をベースとして、「世界一大きな授業」の教材と、学生自身の海外経験を踏まえた内容とした。

＜ワークショップの内容＞

その１：学生が行ったことのある国の言語であいさつをし、その国の印象を簡単に話す。

その 2：100 人村のネタ

・世界の人口　73 億人
・世界で一番人校の多い国　中国 13 億人
・世界の男女比　男 50 人女 50 人
・世界の子供、大人、老人の割合
・日本の子供、大人、老人の割合

その 3：世界①大きい授業のネタから

・小学校に通えないこどもの人数 100 人に 8 人
・小学校に通えない理由
・途中でやめた小学生の数　100 人に 20 人

その 4：100 人村のネタ

・地域ごとの人数　アジア 60 人
・日常語として話す言語で一番多い言葉
　中国語 18 人英語 8 人など
・識字率の地図
・読み書きができない大人の数 100 人に 16 人
・読み書きのできない場合の演劇
・世界の貧富の差の体験（飴の配布）
　豊か 20 人、中 60 人、貧乏 20 人
・体験からの話し合い
・まとめ

写真１　100 人村のスライド

○参加した学級担任の感想

「このワークショップでは，自分たちの知らない世界の様子について，体験を通して楽しく学ぶことができた。また，ワークショップを通して，『世界の中の日本』であることを理解し，世界の中で起こっている問題について関心をもつ大切さを学んだ。そして，これからの活動への期待を膨らませた。体験活動後は，ほとんどの児童が『世界のことについてもっと知りたくなった』と答えていた。」

3-2 日本の小学校でのワークショプの実施

100 人村のワークは 100 人で参加することを前提としているが、本ワークショップでは参加する小学生の人数に合わせて割合はそのままで人数を学校の人数に合わせた。より小学生に現実味のある数にしたかったためである。

実施小学校

・金沢市立西小学校 5 年生 60 人
・金沢市立小丸山小学校 3 年生 70 人
・金沢市立四十万小学校 70 人
・金沢市立額小学校 80 人
・小坂小学校 125 人
・金沢市立大徳小学校 130 人

3-3　台湾の小学校でのワークショップの実施

・100 人村を行っている金沢星稜大学の学生は 2017 年 1 月に台湾の小学校 3 校を訪問する機会を得た。おもに台湾の小学校の英語教育や ICT 活用の現状についての視察であるが、これらの小学校は金沢市内の小学校とも国際交流を行っていることから 100 人村の実習が実現した。

３つの小学校

・台北市日新国民小学校
・嘉儀市文雅国民小学校
・嘉儀市港坪国民小学校

英語での説明となったが、英語の言葉だけでは難しいと考え、PP のスライドには中国語も加えつつ、わかりやすいプレゼンにした。また、人数は台湾の小学校ごとの人数に合わせた

写真 2　台湾港坪小学校での 100 人村

４成果と課題

100 人の数に近い人数で行うワークショップは迫力があり、100 人で実際にやると、日本人は 2 人しかいない計算になり、その少なさを実感できる。また中国語を話す人数の多さが目に付くことになる。

また、世界の中の貧富の差や、一部の人に富が集中している現状がよくわかる。貧富の差の現状を知り、自分がマイノリティーの立場である経験があれば、富の再分配の必要性を感じることができる。

今後は、100 人村と英語教育そしてテディベアプロジェクトなどと組み合わせて、小学校と大学生を繋ぐ形でのプロジェクトをおこなって行きたいと考える。またここにタブレットの活用も加えて、これから必要な国際教育を考えていきたい。

海外の子どもたちとインターネットで話そう！

～第 10 回国際女性デーin 伊丹　いたみミモザの日イベント～

いたみＩＴ倶楽部　薮内 昌彦

いたみＩＴ倶楽部は地域や学校とともに情報化を支援するボランティア・グループで、毎月１回パソコンヘルプデスクを実施している。その活動の場をお借りしている施設、伊丹市立女性児童センターでは"国際女性デー"にちなんだイベント「いたみミモザの日」が毎年開催されて、そのプログラムの１つ 多地点を結ぶＴＶ会議による子どもたちの Cultural Exchange の実践を支援した。

1. はじめに

ミモザの日は国際女性デーに因んだイベントであるが、「国際交流」の日としてもテーマを設けられている。

学校のクラスではなく地域のコミュニティー施設を活動の場とする子どもたちの集まりで、年に１度１日かぎりの単発となってしまうが、センターでは数年前からこのような海外との交流イベントを実践しており、とても好評であるため今年度も同様のイベントとして計画、実践した。

２．目的と方法

2-1 目的

このイベントでは、インターネットのシステム経由ではあるが直接異国の子どもたちと話ができること、自分たちの普段の生活や遊びについて紹介し合うこと、お互いの文化の違いに気づき触れることで国際交流が実践できる。

2-2 方法

実際のコーディネートについて、マッチングから相手校との内容調整、ICT 支援はそれぞれを得意とする JEARN といたみ IT 倶楽部がお手伝いする形で進められた。

ＴＶ会議システムは iEARN が推奨、運用している"Blackboard Collaborate"(BBC)を使用した。この BBC はモデレータ役(司会者)が発表者の画面と音声を切替・制御できて、更には PowerPoint 等の発表資料も共有できるシステムとなっている。

３．活動内容

イベントの概要は以下の通り：

・日時：2017 年 3 月 5 日(日) 10:00～12:00
・場所：伊丹市立女性児童センター
　　児童館　幼児室
・日本側：ボーイスカウトの子どもたち
　　ボーイスカウト伊丹第３団ビーバー隊
・海外側：(５ヶ国と同時接続)
　　中国、台湾、コロンビア、
　　マレーシア、アゼルバイジャン
・進行：福井良子さん（通訳も兼ねる）
　　Rasagnya さん（子どものサポート）

海外の相手校を繋いで下さったのは台湾の Cindea 先生である。彼女が普段から交流を続けている先生方に呼び掛けて紹介していただいた。

発表は各国が交代で順に披露して進行した。日本の子ども達は低学年の児童ばかりだが、毎年のお決まりで、全員に自己紹介だけは以下の３文でしてもらっている。

・I'm xxxx（名前）
・I'm xx（年齢）
・I like xxxxx（好きな食べ物,スポーツ等）

今年はリーダー率先のもと事前に練習をしてきてたので、ほとんどの子がはっきりと話すことができた。

本題の発表内容は、ビーバー隊としての普段の活動についてと遊びについてを写真パネルも使いながら話してくれた。日本からは残念ながら日本語で発表→通訳してもらって相手へ、というスタイルだった。

４成果と課題

毎年のことではあるが、イベントとしても楽しめるものとなった。

各国の先生方ともお互いにイベントの成功を報告し合った。これも毎年恒例となっているが、日本からは施設のセンター長と JEARN 理事長のサインを記した「Certificate」(参加証)を作成して、日本も含め参加した全生徒分を作成して、各国に送った。各先生方からは、参加した子どもたちにとってもとても励みになり良い贈り物だと評していただいている。

施設スタッフとも検討すべき課題は、学校のクラスではないために、いつも１回きりになってしまうのが気になっている。当日だけでなく、それまでに事前の交流を進めてからの成果発表にできれば、更に魅力的なプロジェクトになると考えている。

◇関連情報（Web リンク）

*伊丹市女性児童センター

http://www.itami-danjo.jp/

*「いたみミモザの日」イベント

http://www.itami-danjo.jp/koza/pdf/170305mimoza.pdf

◇写真　（各国のプレゼン）

*BBC 画面ショット

ORIGAMI

https://iearn.org/cc/space-2/group-129

iEARN Japan　福井　良子

折り紙はたった一枚の紙を真四角の折り紙を半分に、１/４にしたりすることで、色々な形をや生き物（動物、鳥、花、虫、建物、乗り物、模様など）を作り出すことができます。
子どもたちは Origami を通して「紙で遊ぶ心」「集中力や忍耐心」「贈り物として人を喜ばせる心」を身につけます。

1. はじめに

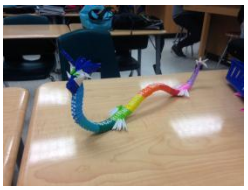
Origami プロジェクトは JEARN プロジェクトの中でも最も古いプロジェクトの一つです。
Origami は日本独特の文化であると思われがちですが、紙を使って遊んだり、教育に使ったりするは多くの国で行われてきました。そのため Origami への興味は海外の国々でも高いものがあります。2016 年-2017 年アメリカ、台湾が活発に参加してくれました。また今年に入り横須賀学院や実践女子大など日本からの投稿が多くなってきていることもうれしい報告です。
学生ボランティア Atuki さんが作って Forum に投稿してくれた origami の動画です。
https://youtu.be/b4xKeJzPb2Q

今までの主な参加国：
Argentina, Australia, Azerbaijan, Belarus, Canada, , Iran, Italy, Japan, Mexico, Oman, Pakistan, Palestine, Poland, Romania, Russia, Senegal, Slovenia, Taiwan, Trinidad and Tobago, Turkey, Ukraine, United Arab Emirates, nited States, Uzbekistan

２. 目的と方法

Origami の交流方法はむずかしくありません。パートナースクールを見つけて交流する場合もありますが、多くは自分たちの好きな時に Origami を楽しんで、フォーラムに発表します。プロジェクト参加した先生たちがそれらを見て、意見を述べたり、ほめあったりします。交流のスケジュールにしばられない自由な交流を楽しむことができます。

３. 2016-2017 年度フォーラムへ投稿された Origami 作品集



Girl Rising

啓明学園中学高等学校　関根　真理

１　はじめに

マララさんの勇気ある行動に共感し、iEARN の Collaboration Center に新しいプロジェクトとして女子教育の大切さについてお互いに学びたいと Teachers Forum に投稿しました。その後、iEARN のアメリカ人ファシリテーターである Ed Gragert 氏より、Girls Rising の DVD を視聴し、学びを共有したらどうかとの提案があり、このプロジェクトが 2014 年に立ち上がりました。

２　目的と方法

9 ヶ国の少女たちの置かれている現状を映像を通して身近に感じ、女子教育の大切さと授業で学んだこと、実際に立ち上げたプロジェクトを他国の生徒たちと Girls Rising の Forum に投稿することによって共有することが出来ます。他国の生徒と時間の調整が合えば、スカイプ会議を実施し、お互いの国の現状や学びの成果を発表し合うことも可能です

３　活動内容

2016 年度は、高３選択国際理解の生徒 25 名がこのプロジェクトに参加しました。10 月より、Girl Rising のカンボジア、ハイチ、ネパールとアフガニスタンの少女のビデオを視聴しました。このプロジェクトの優れていることは、各国の少女についてのフォルダーがフォーラムにあり、それぞれについての課題が出されていることです。生徒達は、グループごとに課題について話し合い、学びを深めることができました。その後、特に思いを寄せた少女の生き方について感想を投稿しました。授業を通して、生徒たちは各国の少女たちが置かれている現状を映像で学び、それらの問題についてより身近に感じるようになりました。紹介されている少女たちは、大きな困難の中にあっても諦めず、自分たちの夢を達成するために立ち上がり、行動します。ここから生徒たちは、勇気と力を得て、自分たちも何かしなければという思いになります。Girl Rising のムーブメントは、このプロジェクトに参加する生徒たちが力強い地球市民になるように力づけることの相互の繋がりも生み出します。また、DVD を英語で視聴し、Forum 上で英語で感想やプロジェクトを紹介することによって、英語力を向上させることも出来ました。

４　反省点

本校の高校 3 年生は 2 学期で授業が終了します Girl Rising を視聴し、iEARN のフォーラムを登校したのが昨年 11 月だったために、他国の生徒との交流を活発に行うことが出来ませんでした。この問題を改善するには、交流を希望していることを事前に Teacher’s Forum や Girl Risng のフォーラムに投稿し、参加希望校を募り、計画的に交流をすることが必要です。昨年は、本校の生徒が意見を投稿した後、1 月にアメリカや台湾の生徒がコメントをしていました。このようなタイムギャップを避けるためには、事前に相手校を確認し、メールなどでスケジュール調整をすることが大切です。昨年度の反省を受けて、2017 年度の 4 月下旬より、アメリカの高校 3 年生と活発な意見交換をしています。交流では、Girl Rising の内容だけではなく、お互いの国、文化、流行、高校生活についても興味が沸き、生で意見交流をしたいという思いから、スカイプ交流をする予定です。

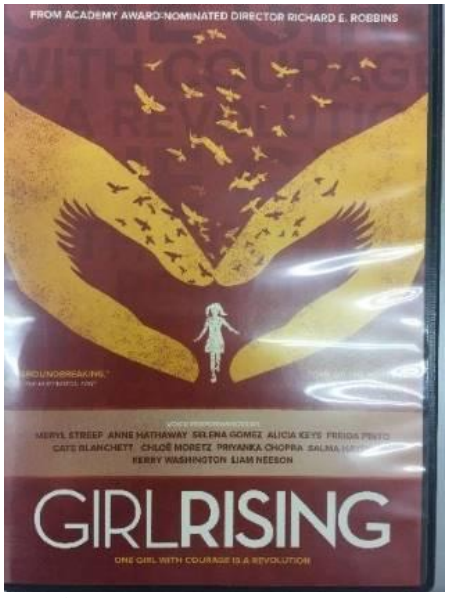


写真１　教材 DVD

写真２　参加したメンバー

折りづると灯ろうの交換による国際交流

兵庫県立北須磨高等学校　壷井宏泰

折り鶴による国際交流は、以前から各地で実施されており、言語や年齢を問わず誰でも参加しやすいという利点もあり、広く認知されている。また、灯ろうを交換し、灯ろう流しを世界各地で実施して平和について考えるイベントも広がってきている。しかし、これらの活動は NPO 等が単独で実施する場合が多く、全体的な盛り上がりに欠けているという側面もあった。iEARN のプロジェクトとしての実施に向けた取り組みを紹介する。

1. はじめに

昨年、オバマ大統領が広島を訪問した際に、広島平和記念資料館に折り鶴を寄贈し、安倍首相も真珠湾のアリゾナ記念館を訪問した。アリゾナ記念館には原爆の子の像のモデルとなった佐々木禎子さん自身が病室で折った「サダコの鶴」が、甥の佐々木祐滋氏の手で贈呈され、展示されている。このように折り鶴による国際交流は平和祈願の象徴として世界中から注目を集めている。また、灯ろうに平和の願いを込めてメッセージを書き、それを交換して、世界各地で灯ろう流しを実施する取り組みも広がってきている。これらは、言語、年齢を問わず誰でも参加しやすく、意義も大きいので、もっと広げていくべきだと考えている。

２．目的と方法

2-1 目的

この活動を通して、日本側のねらいは３つ。

１）平和を祈願する機会を増やす。

２）交流のきっかけをつくり、他の分野の交流にもつなげる。

３）異文化理解のきっかけとする。

2-2 方法

まずは、日本国内で現在進行中の「祈りづるプロジェクト」への参加協力を呼びかける。「祈りづるプロジェクト」とは、佐々木祐滋氏が今年の８月６日にユタ州の博物館にサダコの鶴を寄贈する際に、350 万羽の祈りづるを合わせて寄贈するプロジェクトであり、350 万は太平洋戦争での日米合計の犠牲者数を表す。５月にユネスコスクールのネットワークを使い協力を要請したところ、全国のユネスコスクールから協力の申し出や問い合わせが殺到しており、大規模なネットワークを構築できる可能性がある。

次に、現在アメリカ国務省が募集している小規模助成に応募して補助金をもらい、交流が活発になった段階でお互いの学校を訪問しあう際の費用を助成できるようにし、交流を発展させる予定である。ただしこれは日米の交流に限りる。

期　間：2017 年 7 月から

内　容：実施計画：折り鶴、灯ろうの交換を WEB で呼びかけ、マッチングをして交流する。

３.成果と課題

ユネスコスクールや JICA 等のネットワーク等を使って「祈りづるプロジェクト」が広がりをみせているので、爆発的にこのプロジェクトが広がる可能性を秘めていると考えています。しかし､以前からの実践が単発的に終わったり、広がりをみせなかった理由には何かがあり、今後実施していく上で、それが克服できるかどうかが課題です。

世界中で、テロや紛争や移民問題や核開発等で平和が脅かされている現状では、これらの取り組みがより重要になってくると思われます。ぜひ、みなさんのご協力をいただいて、プロジェクトを成功させたいと考えていますのでご協力お願いいたします。

Kansai Youth　Project

第 1 回あいくるプロジェクト

あいくるプロジェク　田中彩奈

「あいくるプロジェクト」（あいくる＝Active International Collaborative Learning)は、3 か年計画のプロジェクトです。3 年間、様々な形態で JEARN プロジェクトを実施しながら、大学生(Youth)たちを中心とした、出会い・学びの場を提供していきます。

1　はじめに

写真 1　　FACEBOOK より

私たちあいくるのスタッフが、JEARN に出会ってから、7 年が経ちました。
当時大学生だった私たちが、ひょうご子どもサミットをはじめとした JEARN のプロジェクトにかかわる中で、経験し学んだことは、社会人になった今振り返っても、かけがえのないものです。
自分で考えること。多種多様なバックグラウンドを持つ人たちと一緒に一つのものを作り上げること。――大学生活の中では決してできない経験を通して、私たちは多くのことを教えてもらいました。
私たちは、JEARN のプロジェクトが、子どもたちだけでなく、大学生やそこにかかわる大人たちにとっても、学びや化学反応を起こす可能性を持っていると、信じています。

2　目的

・Youth（大学生）が、主体的に考え、外国人スタッフや大人たちと協働し、子どもたちをファシリテートする経験を積む機会の提供。
・中高生に、大学生・外国人・社会人と共にボランティアをする経験の提供。
・子どもたちが国際交流と防災について、興味を持つ、きっかけの提供。

3　今後の活動予定

（1）　開催日時
2017 年 7 月 29 日(土)に第 1 回目を実施予定。
（2）　場所
神戸市北区社会福祉協議会すずらんだい児童館
（3）　内容
第一回は、その皮切りとして、夏休みの児童館で子どもたちと防災・異文化交流のクイズイベントをします。子どもたちはチームに分かれて、外国人ゲストから各国の防災について学び、チームごとにクイズを作成、全体でクイズ大会を行います。
（4）　【Facebook ページ】より以下抜粋
https://www.facebook.com/events/301256973661731/?ti=cl

◆夏休みの児童館で、子どもたちと防災クイズイベントをします！
◆外国人スタッフと一緒に子どもたちが積極的に考え、学べるようファシリテートしてくれるボランティア大募集！
≪おすすめポイント≫
1．リーダー的経験ができる！
2．日本にいながら国際交流ができる！
3．企画から参加できるボランティア！
【活動内容】
・子どもたち（小学生）がグループごとに外国人に海外の防災事情等についてインタビューし、それをもとに協力してクイズを作ります。
・グループごとの話し合いをファシリテートし、まとめてくれるボランティアさんを募集
※外国人スタッフとして、アメリカ・インド・中国から参加予定。※日本語がメインですが、英語がわかる方はアメリカ・インドのグループを担当予定です。（スタッフの会話は半分英語です！）